第１章 長崎市の歴史的風致形成の背景

１ 自然的環境

（1） 位置

長崎市は、九州の西端、長崎県の南部に位置しており、九州の中枢都市である福岡市から約 110 ㎞の距離にある。市域は、東経 129 度 59 分 38 秒～129 度 32 分 37 秒、北緯 32 度 32 分 55 秒～32 度 58 分 07 秒の範囲にあり、北部で西海（さいかい）市、北東部で西彼杵（にしそのぎ）郡時津町・長与町、東部で諫早（いさはや）市と接している。

明治 22 年（1889）、旧幕府直轄地を中心とした区域を市域として市制を布いたときの面積は約 7.00 ㎢であったが、その後の 12 次にわたる隣接自治体の編入合併や公有水面等の埋立てを経て、現在の市域は東西約 42km、南北約 46km、総面積は約 406 ㎢である。

長崎市の位置

（2） 地勢

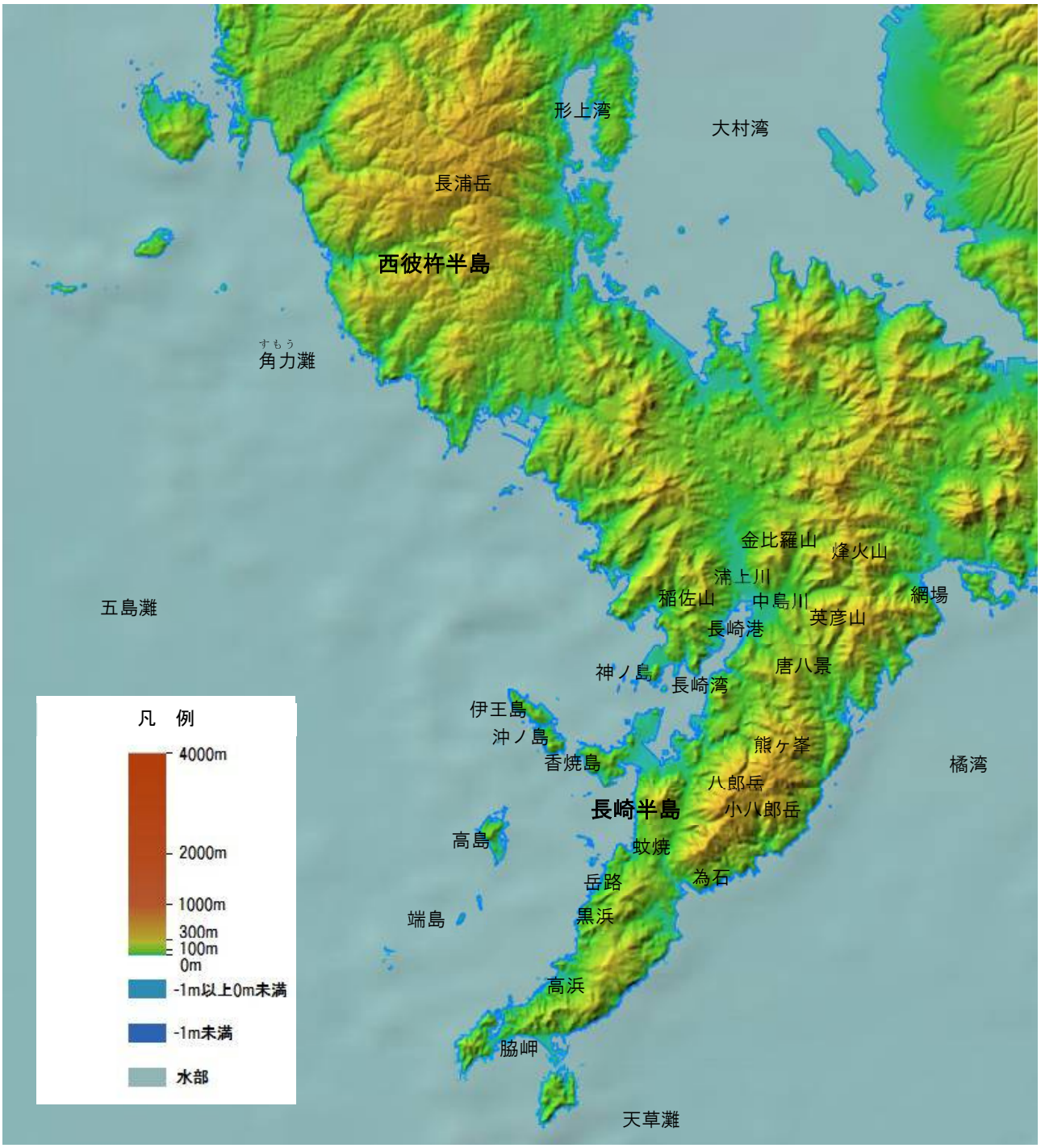
長崎市は、西彼杵半島南半部と長崎半島（野母半島）及び周辺の島しょ部からなり、西の五島灘、北の大村湾、東の橘湾、南の天草灘に囲まれ、長い海岸線を有している。

市の北西域を占める西彼杵半島は、大村湾と五島灘の間にあり、長崎半島との結合点から北に伸びている。その大部分が標高 400m内外の隆起準平原で、最高峰は半島中央部にある長浦岳（560m）である。内海となる大村湾側は、形上湾をはじめ大小の入江や小島などが分布する溺れ谷で、これに対し、五島灘に面した外海側は、断層崖で比較的出入りが少ない海岸線を形成しており、奇岩・海食棚を伴った島しょ群が分布する。平地は、河川沿いに形成された谷底低地などに見られるが、概ね山裾が海に迫る急峻な地形的特徴を有している。

市の南部に位置する長崎半島（野母半島）は、最大幅約６km、長さ約 22km で南西方向に伸びている。半島は為石と蚊焼を結ぶ線によって南北に二分され、北部は標高 400～500mの定高性を持つ隆起準平原で、八郎岳（590m）をはじめ、熊ヶ峰（569m）、小八郎岳（564m）などの峰が連なる。また、南部は標高 200～300mの山稜が連なっている。海岸線は海食崖が発達しているが、為石、岳路、黒浜、高浜、脇岬など南部を中心に砂丘の発達がみられる。西彼杵半島と同様に、平地に乏しい地形である。

西彼杵半島と長崎半島の結合点に形成された長崎湾は、北東方向に湾入する細長い入江で、湾口部の幅は約１km、奥行き約 7.3 km、水深は湾口部で約 40m、湾奥部で約 10mを測る。湾の出口に分布する、伊王島や沖ノ島、香焼島、神ノ島などが防波堤の役割を果たし、湾奥部に開かれた長崎港は天然の良港となっている。標高 300～400mの唐八景・英彦山・烽火山・金比羅山・稲佐山などの山々が湾をとりまき、北から浦上川、北東から中島川が流入している。これらの河川沿いの河岸段丘、及び低地の埋め立てによって造成された平地を中心に、市街地が展開している。

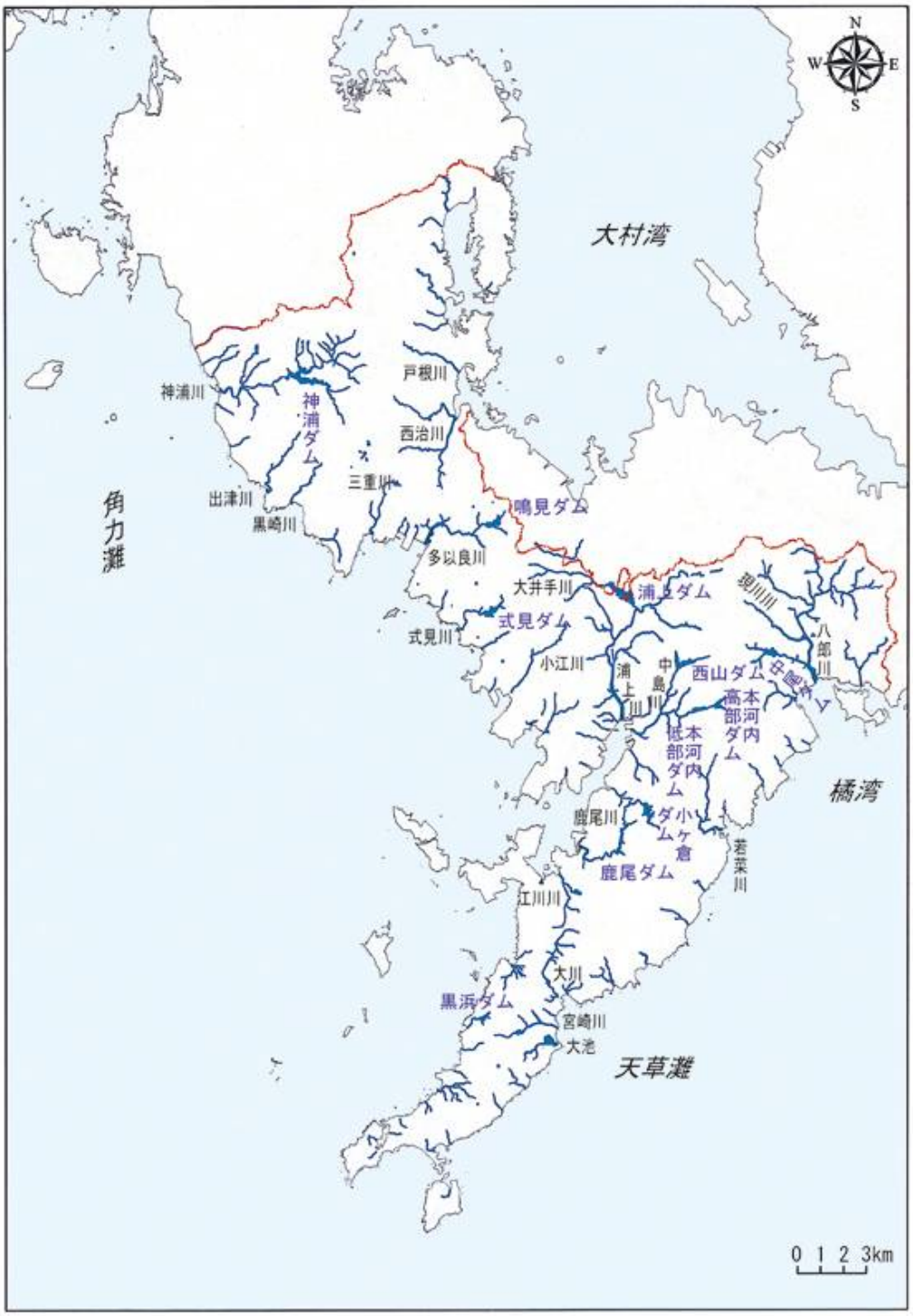
天然の良港「長崎港」



長崎市の標高図（地理院地図　国土電子 WEB より作成）

(3) 水系

長崎市には連なる山々を水源とする河川が数多くあるが、地形的特徴から、総じて河川延長が短く、勾配が急で流域面積が狭い小河川が多い。地域別にみると、西彼杵半島方面から網場方面にかけては比較的河川は長く、長崎半島方面の河川は全体的に短い傾向にある。そのなかでも比較的大きな河川としては、角力灘に流入する神浦川(約 9.5km)、多以良川(約 4.0km)、式見川(約 4.1km)、長崎湾へ流れる浦上川(約 9.4km)、浦上川水系の大井出川(約 5.6km)、中島川(約 5.5km)、東部の橘湾に注ぐ八郎川(約 6.4km)、南部の鹿尾川(約 9.9 km)などがある。



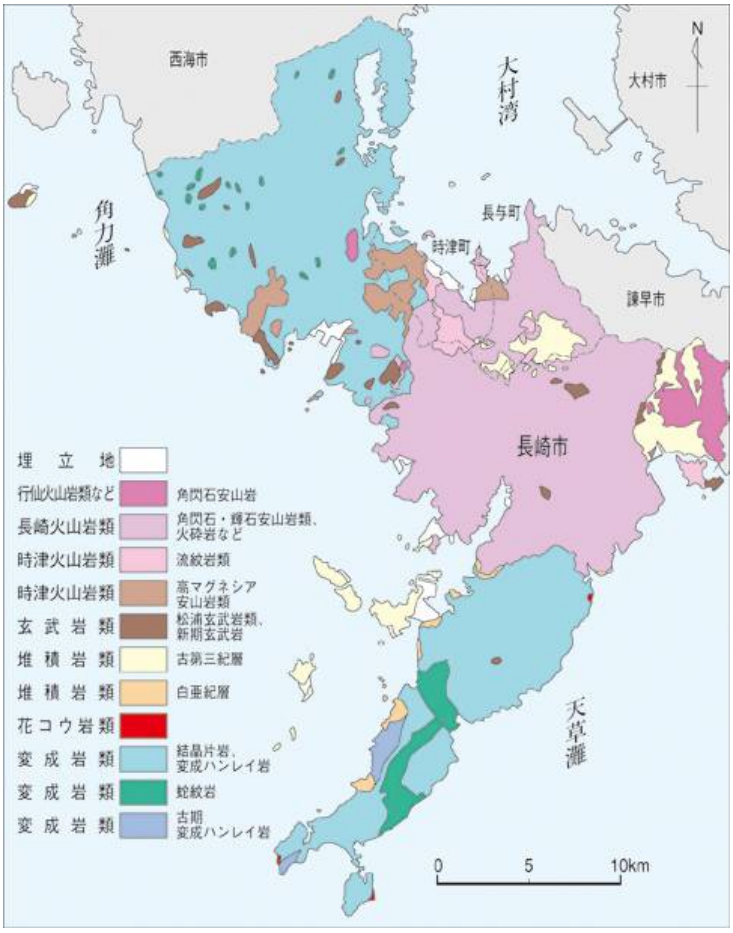
長崎市の水系(『新長崎市史　第一巻　自然編』より)

(4)　地質

西彼杵半島と長崎半島の地質は、ともに結晶片岩類を主体としており、西彼杵変成岩類、または長崎変成岩類と総称されている。変成年代は 9,000 万～6,000 万年前で、主な岩石は黒色片岩や緑色片岩であり、長崎半島中南部など各地に蛇紋岩の貫入がみられる。また、西彼杵半島基部の三重海岸や戸根渓谷ではヒスイ輝石が含まれる。なお、長崎半島中央西岸の以下宿付近の海岸などには、変成はんれい岩の露出が見られるが、同じ変成岩類でも生成年代が４億 8,000 万年前と非常に古く、九州最古の岩石の一つとされる。

長崎半島西岸には、白亜紀のれき岩・砂岩・泥岩などの堆積岩が分布する。このうち、白亜紀後期（約 8,100 万年前）の地層からは、ティラノサウルスの歯や草食恐竜ハドロサウルスの骨などの化石が発掘されている。また、香焼、伊王島、高島などの島しょ部においては、古第三紀（約 6,600 万年前～約 2,303 万年前）の堆積岩が分布し、石炭層である高島層群が形成されている。

西彼杵半島と長崎半島が結合する中部一帯は、西彼杵変成岩類が新生代の火山活動による噴出物におおわれており、安山岩と凝灰角礫岩の互層となっている。また、東部は古第三紀層に貫入した新第三紀のものと考えられる貫入岩類と、第四紀の長崎火山岩類で構成されている。



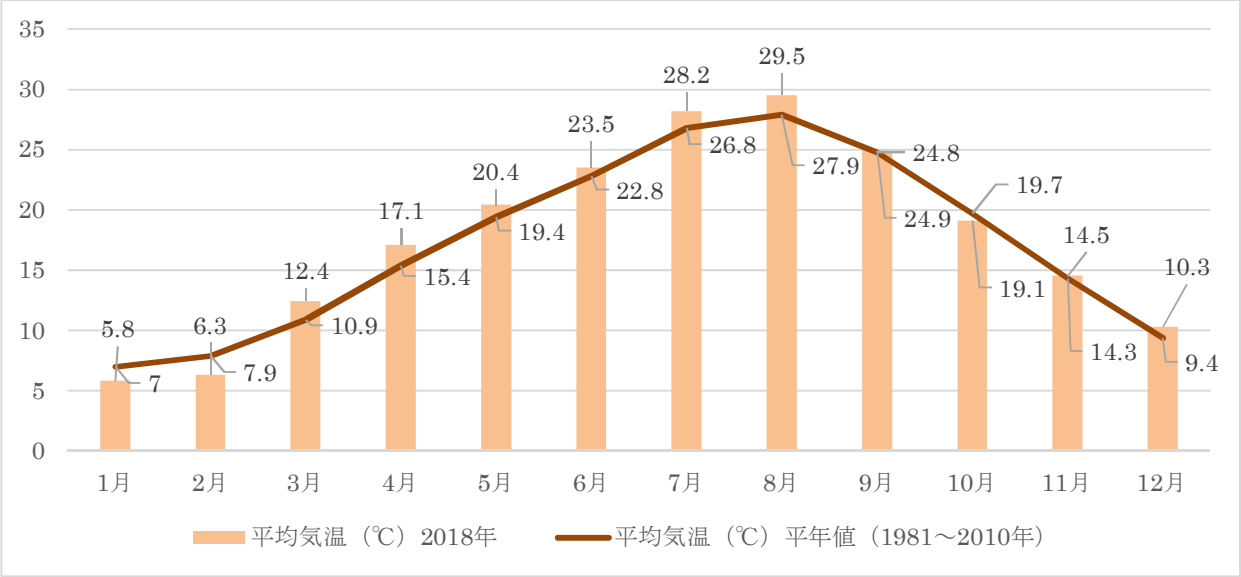
長崎市の地質概略図（『新長崎市史　第一巻　自然編』より）

ヒスイ輝石
（『新長崎市史　第一巻　自然編』より）

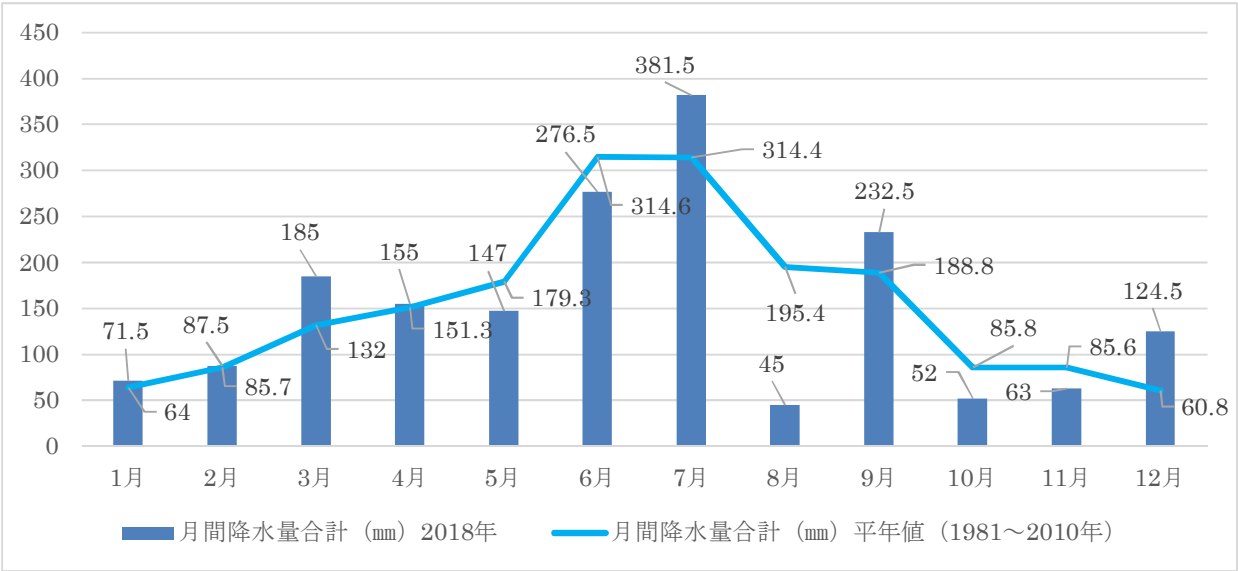
黒浜町の九州最古の変成はんれい岩
（『新長崎市史　第一巻　自然編』より）

（5） 気象

気候は、壱岐（いき）・対馬（つしま）を除く長崎県と熊本県の一部、鹿児島県の西部にかけて分布する西海（さいかい）型気候区に属し、温暖多雨を特徴とする。現在の平年値（昭和 56 年（1981）から平成 22 年（2010）の平均値）によると、年平均気温は 17.2℃、年降水量は 1,857.7 ㎜となっている。梅雨期から夏季にかけて温暖多湿となり、梅雨期には年間降水量の約 25%に相当する降雨がある。夏季から秋季にかけては、集中豪雨や台風による災害に見舞われることも多い。昭和 57 年（1982） 7 月 23 日に発生した長崎大水害では、一時間最大雨量 127.5㎜ を記録した集中的な豪雨が一気に斜面を流れ、がけ崩れや土石流などの土砂災害、中島川や浦上川の氾濫による都市型水害が同時発生し、甚大な被害をもたらした。冬季には北西季節風の影響を受けることから寒冷で乾燥した日も見られるが、東シナ海を北上する対馬（つしま）暖流の影響を強く受け、概ね年間を通じて温暖で、寒暖差の小さい海洋性気候に恵まれている。



長崎市の気温　平成 30 年（2018）及び平年値



長崎市の降水量　平成 30 年（2018）及び平年値

(6) 植生と植物相

長崎市は、森林植生として温暖帯に属し、植生学的にはヤブツバキクラス域に入り、海抜約 500mを境に、上部はカシ林域、下部はシイ林域になる。自然林は、丘陵地のほとんどがスダジイ－ミミズバイ群集に含まれ、スダジイ、コジイのほか、シイモチ、ミミズバイ、ルリミノキなどが見られる。また、海抜 350～500mの谷沿いに発達した自然林は、ウラジロガシ－イスノキ群集に含まれ、スダジイ、ウラジロガシ、イスノキ、ホソバタブなどが見られる。海岸低木林には、トベラ、マサキ、オオバグミ、シャリンバイなどが生育している。

植物相の最大の特徴は、南方系植物の分布が著しい点にある。分布する主な植物としては、オオイワヒトデ、カツモウイノデ、コクモウクジャク、ヤワラハチジョウシダなどがあり、特にヘゴ、リュウビンタイ、ケホシダなどの希少植物も見られる。

また、全国的にも稀なカネコシダは、日本最大の群落が琴海（きんかい）地区にあり、長崎県の天然記念物に指定されている。湿地には、ヤマトミクリ、ゴマシオホシクサ、クロホシクサなどが見られ、山地の尾根すじなどの土壌が浅い場所などでは、オガルカヤ、メガルカヤ、チガヤなど普通に見られる植物のほか、ムラサキセンブリ、ノヒメユリなどの絶滅危惧種が生育している。さらに、海岸植物では、ハマヒルガオ、ハマエンドウ、ハマゴウ、ハマボッス、ホソバワダン、ハマナデシコなどが生育している。

スダジイ-ミミズバイ群集
（『新長崎市史　第一巻　自然編』より）

トベラ-マサキ群集
（『新長崎市史　第一巻　自然編』より）

カネコシダ
（『新長崎市史　第一巻　自然編』より）

ハマボッス
（『新長崎市史　第一巻　自然編』より）

２ 社会的環境

（1） 長崎市の沿革

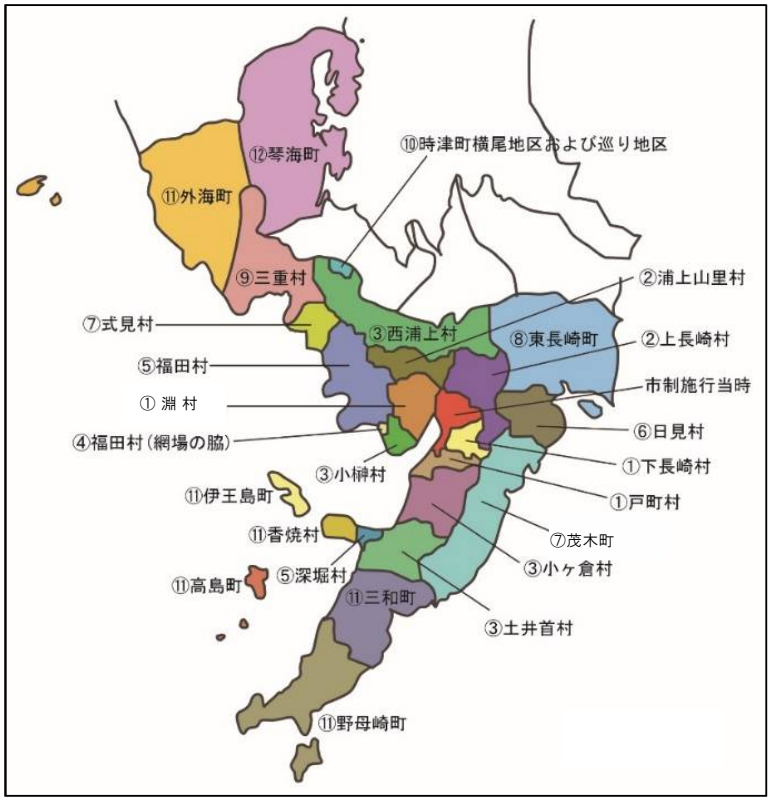
明治 22 年（1889）の市町村制施行により、旧幕府直轄領を中心とした区域を市域として市制が施行された。初代市長には旧会津藩士の北原雅長（きたはらまさなが）が就任、市政施行時の面積は約 7.0 ㎢、人口は約 55,000 人であった。

明治 33 年（1900）に制定した市章の外形は、草書の「長」を図案化し、「鶴の港」と讃えられた長崎港を象徴して折鶴の形を星状に配している。内形は、幕末の安政年間に開港した全国の５つの港（長崎、函館、新潟、横浜、神戸）の一つであることを誇りにしたところから、５つの「市」の字を加えたものである。当時、この５港に３府（東京、京都、大阪）を加えた全国の大都市を「三府五港（さんぷごこう）」と呼んでいたことに因む。

明治 31 年（1898）の淵村（ふちむら）、戸町村、下長崎村、浦上山里村の一部、上長崎村の一部の編入以降、12 次にわたる隣接自治体との合併により、旧佐賀藩諫早（いさはや）領・深堀領や旧大村藩領の一部などが編入されて現在に至っている。特に、平成 17 年（2005）から 18 年（2006）にかけて行われた西彼杵郡（にしそのぎぐん）香焼（かやぎ）町、伊王島（いおうじま）町、高島町、野母崎（のもざき）町、外海（そとめ）町、三和町及び琴海（きんかい）町との合併によって、従来の面積 239 ㎢に新市域 167 ㎢が加わり、面積は約 1.7 倍に拡大した。この合併により西彼杵（にしそのぎ）半島の南半部、長崎半島の全域と周辺の島しょ部が市域に加わるとともに大村湾にも海岸線を持つこととなり、現在の市域を構成している。

長崎市は、長崎県の県庁所在地として、長崎県の行政、経済、文化に関する施設や機能が集積し、平成９年（1997）には中核市の指定を受けた西九州地域の拠点都市の一つとなっている。

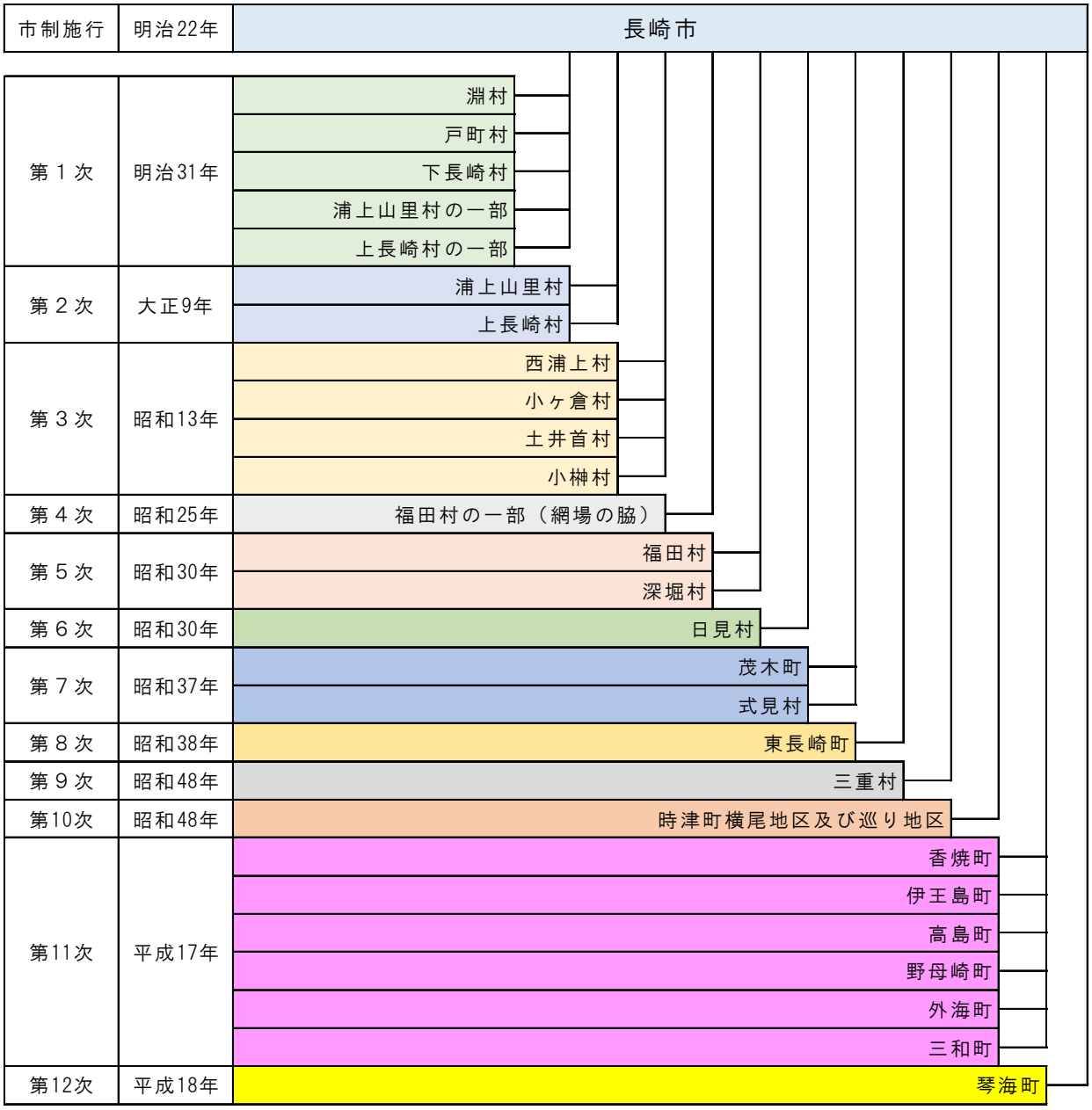
長崎市章



長崎市域の変遷（『新長崎市史　第一巻　自然編』より）

区　分	合併年月日	合併区域	面　積 （km2）	人　口 （人）	人口密度 （人/km2）
市制施行	明治22年4月1日	市制施行当時	7.00	54,502	7,786
第1次	明治31年10年1日	淵村、戸町村、下長崎村、浦上山里村・上長崎村の一部	16.00	113,307	7,082
第2次	大正9年10月1日	浦上山里村、上長崎村	41.10	232,912	5,667
第3次	昭和13年4月1日	西浦上村、小ヶ倉村、土井首村、小榊村	90.54	268,945	2,970
第4次	昭和25年4月1日	福田村の一部（網場の脇）	90.60	247,248	2,729
第5次	昭和30年1月1日	福田村、深堀村	114.23	292,765	2,563
第6次	昭和30年2月1日	日見村	121.32	296,323	2,442
第7次	昭和37年1月1日	茂木町、式見村	165.41	372,027	2,249
第8次	昭和38年4月20日	東長崎町	207.90	392,072	1,893
第9次	昭和48年3月31日	三重村	238.12	433,196	1,819
第10次	昭和48年4月1日	時津町横尾地区及び巡り地区	239.03	437,049	1,828
第11次	平成17年1月4日	香焼町、伊王島町、高島町、野母崎町、外海町、三和町	338.72	447,103	1,320
第12次	平成18年1月4日	琴海町	406.35	454,739	1,119

合併の経緯



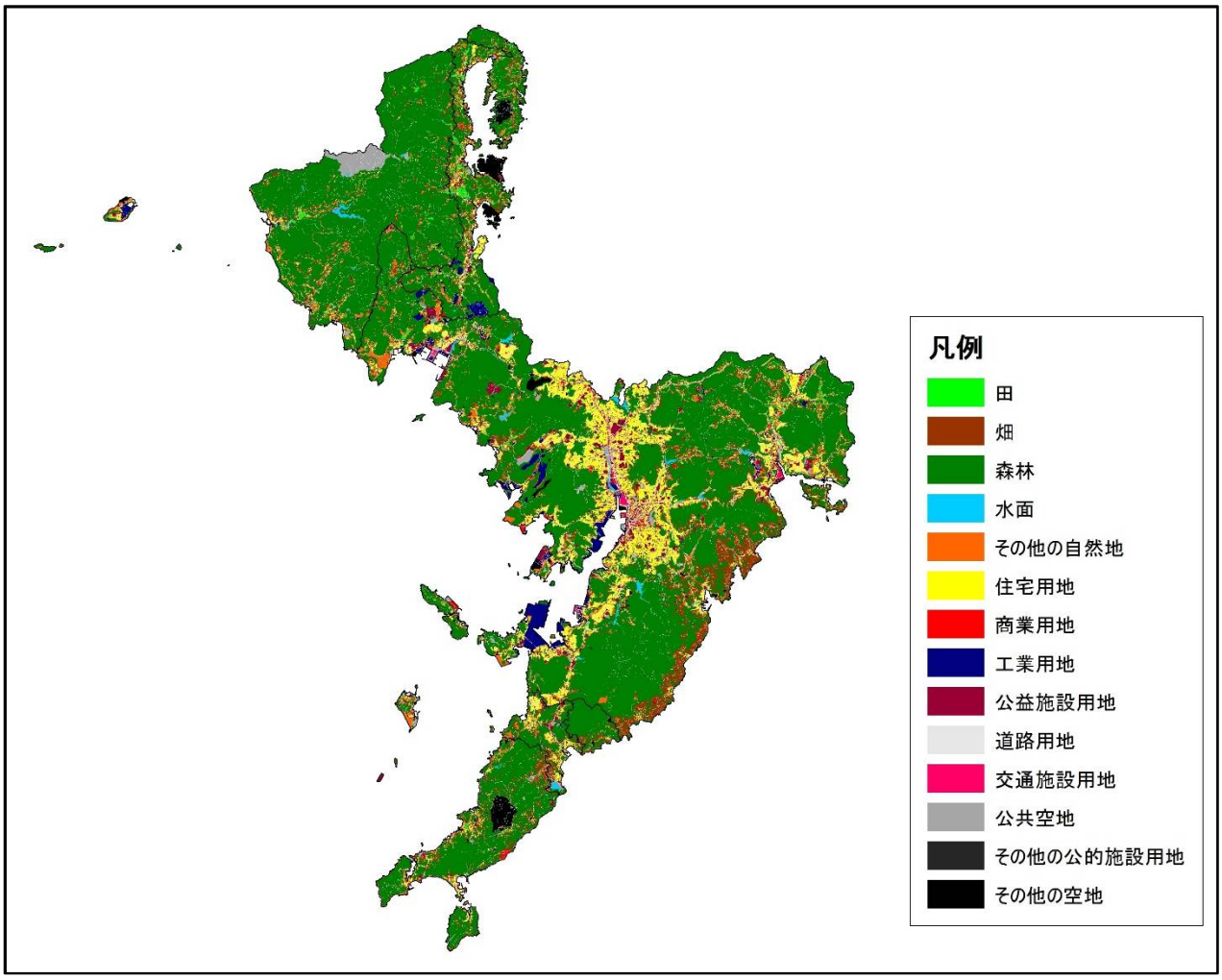
合併の経緯

(2) 土地利用

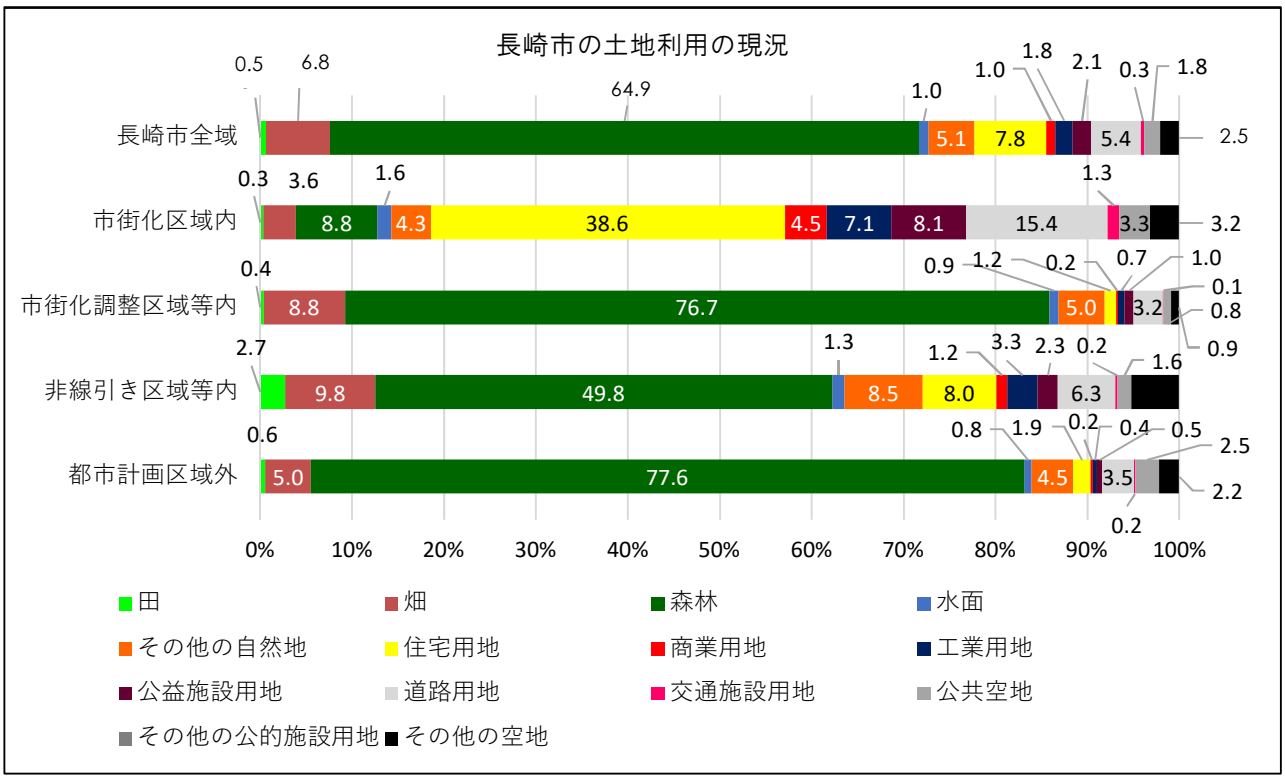
長崎市の土地利用は、その地勢的な特徴から、自然的土地利用が市域の約 78%を占め、都市的土地利用は約 22%にとどまっている。自然的土地利用のうち、田が 0.5%、畑が 6.8%で農地の占める割合は小さく、大半が森林（64.9%）である。また、長崎都市計画区域の市街化区域内においては、都市的土地利用の割合が約 81%と高くなっている。用途地域の構成は、住居系が市街化区域全体の 79.7%、商業系が 7.1%、工業系が 13.2%である。

平地が極端に乏しく高密な土地利用がなされており、長崎港内港部の造成地とそこに注ぐ中島川周辺や、浦上川沿いに南北に細く連なる比較的平坦な地域に形成された中心市街地に、行政、商業、業務、交通等の都市機能が集積している。戦後から高度経済成長期の人口増加に伴い周辺の斜面地が宅地化され、丘陵や山腹を這い上がるように斜面市街地が形成された。この高密な土地利用により、長崎市の中心市街地では独特の都市景観、夜間景観が形成されている。郊外には、丘陵を切り開いた大規模な住宅地が点在しており、また、斜面地は棚田や段々畑など農地としての積極的な利用もなされ、ビワやミカンなどの果樹栽培が行われている。

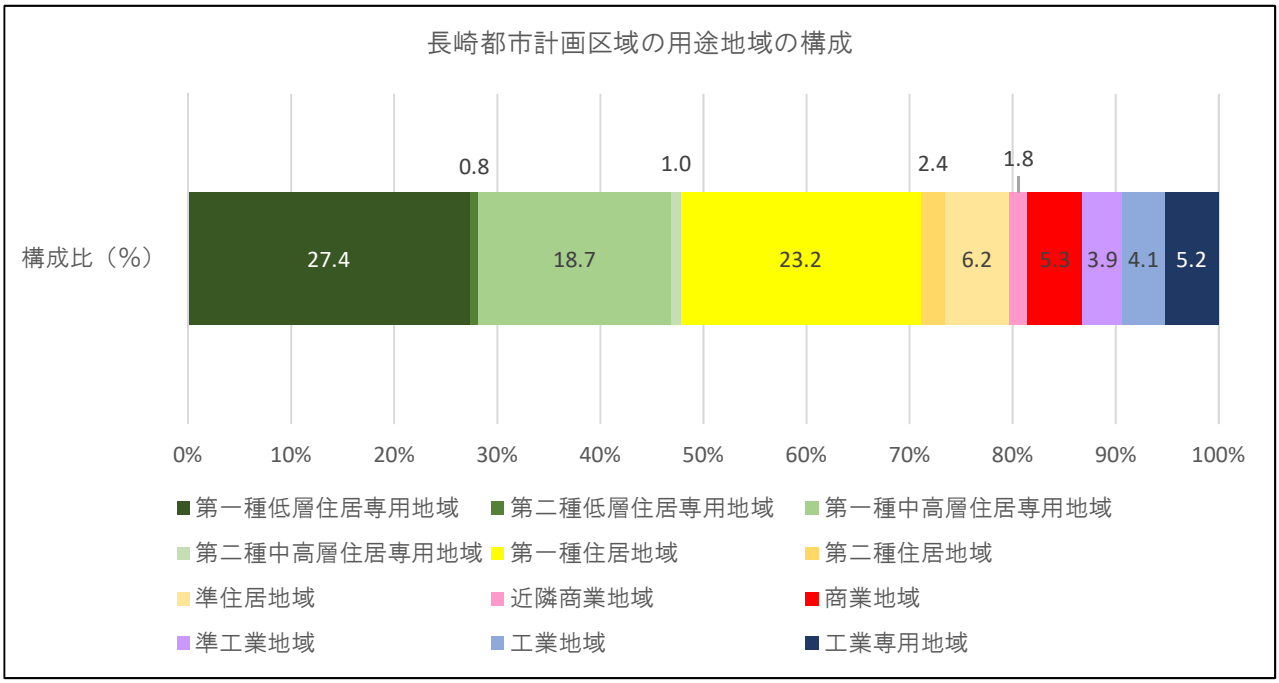
港湾部においては大規模な埋立てが行われ、造成地には、長崎港沿岸では造船業などの工業地域が、北西部の三重地域では国内有数の水産基地が形成されている。



長崎市の土地利用の現況（「長崎市都市計画マスタープラン」より）



長崎市の土地利用の現況（「長崎市都市計画マスタープラン」より）



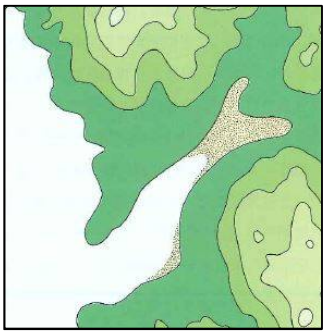
長崎都市計画区域の用途地域の構成（長崎市都市計画マスタープラン」より）

(3) 長崎港の埋立ての歴史

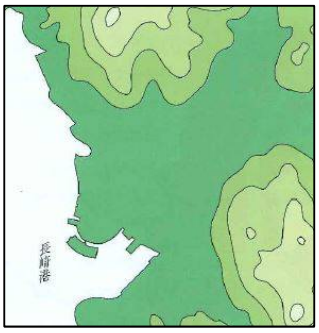
長崎の都市形成は、中島川と浦上川に挟まれた河岸段丘上で始まったが、多くの都市がそうであるように、長崎市においても自然の地形を巧みに利用するとともに、自然の地形に人為的な改変を加えることで都市が形作られてきた。

元亀２年（1571）、長崎が開港すると、多くの諸国の商人やキリシタンが流入したため、広い土地を確保する必要が生じた。そこで地形的制約による土地不足を解消するため、長崎港の埋立てにより陸域の造成が行われた。江戸時代には、中島川の沿岸などが盛んに埋め立てられ、キリスト教の布教阻止と貿易統制を目的としてポルトガル人を収容するために作られた出島や、中国との貿易品を保管するための新地蔵なども埋立てにより築造された。今も残る浜町、築町、新地町などの地名が、埋立ての歴史を伝えている。

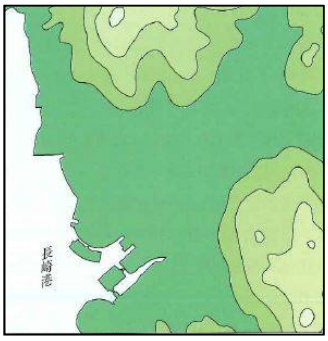
幕末の安政５年（1858）には５か国と修好通商条約が締結され、外国人居留地の造成のため大浦湾が埋め立てられた。特に大規模な埋立ては明治期に行われ、明治 15 年（1882）から第１次長崎港湾改修事業として実施された中島川の変流工事では、大波止、大黒町沿岸を埋め立てた。明治 30 年（1897）からの第２次港湾改修事業では、浦上川河口や市街地海岸部、出島周辺の埋立てなど大規模な埋立てが行われた。20 世紀に入り、長崎港はさらなる湾岸施設の建設が求められ、大正９年（1920）からの第３次港湾改修事業により近代的な港湾施設を建設、接岸岸壁の整備が行われた。これら３次にわたる港の埋立てにより、現代の長崎の都市の骨格が形成され、近年においても、松が枝国際観光埠頭や長崎水辺の森公園の造成が行われるなど、長崎港の海岸線は時代とともに移り変わっている。



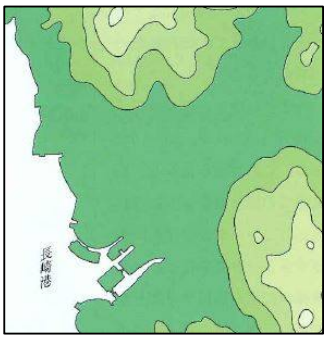
開港前の長崎
（永田信孝『新・ながさき風土記』より転載）



1690 年ごろの長崎
（「長崎絵図」（1689 年より前）、「唐船来朝図　長崎図」（1689 年）、「寛文長崎図屏風（1673 年）より作成」

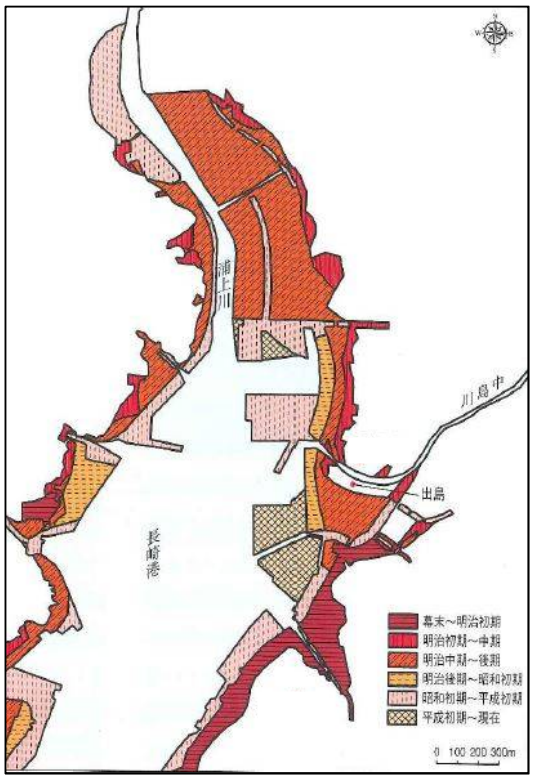


1760 年ごろの長崎
（「肥前　長崎之図」（1764 年）より作成



1820 年ごろの長崎
（「肥州長崎図」（1801 年）、「長崎之図」（1801 年）、「長崎図」（1821 年）より作成

江戸時代の長崎港の海岸線の変遷　※等高線は 50mごと



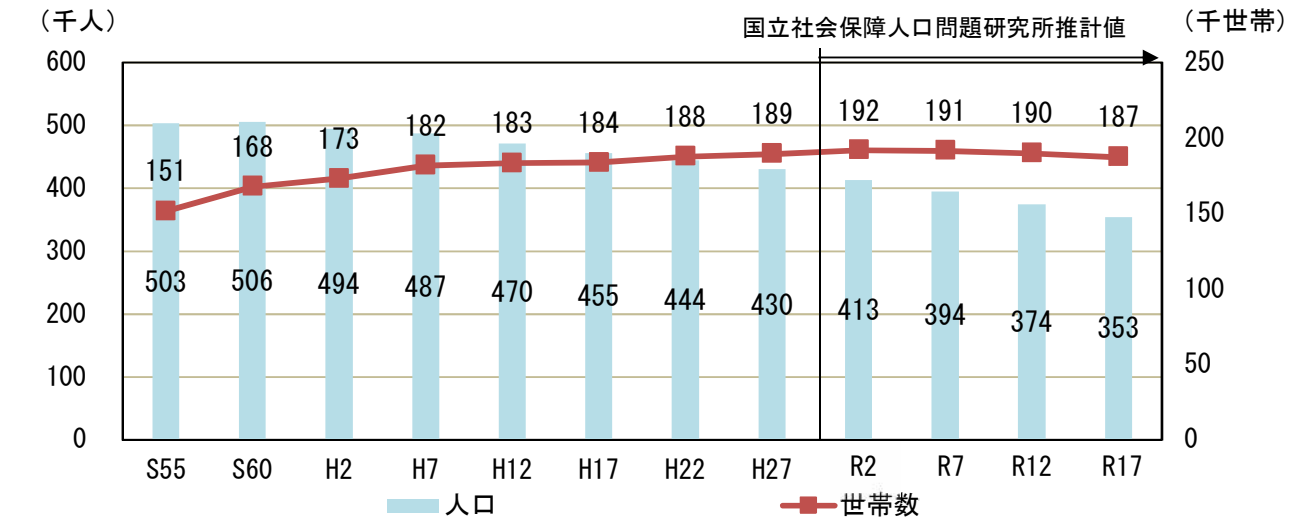
幕末以降の長崎港の海岸線の変遷

（『新長崎市史　第一巻　自然編』より）

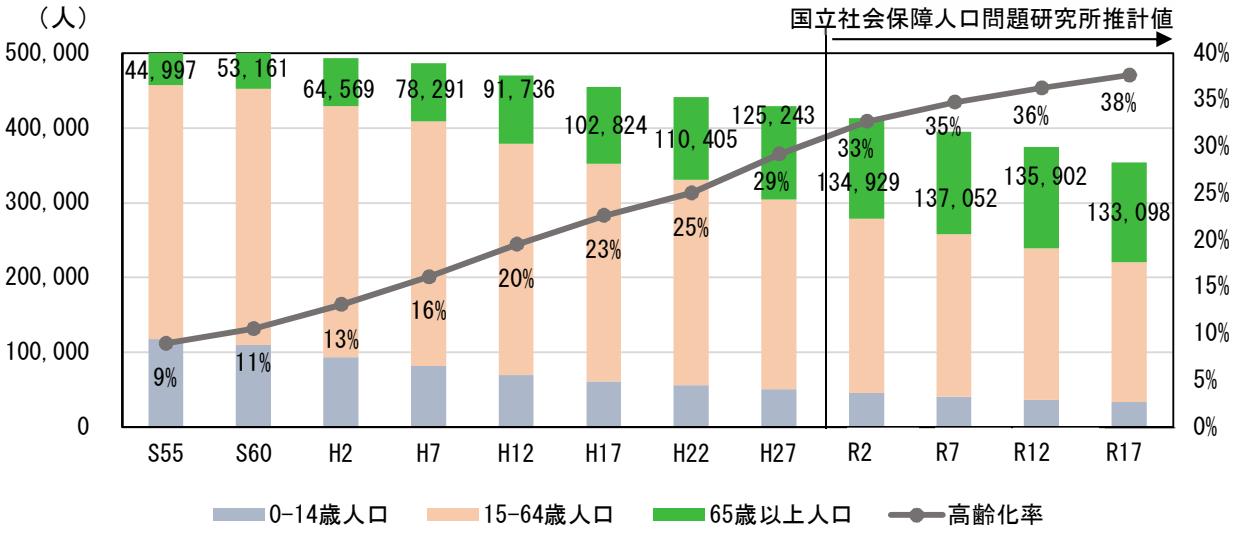
(4)　人口動態

長崎市の人口は、隣接自治体との合併による市域の拡大や経済成長とともに増加を続けてきたが、昭和 60 年（1985）の 505,566 人（現市域での組替値）をピークに減少に転じ、平成 27 年（2015）国勢調査確定値で 42 万 9,508 人となっている。国立社会保障・人口問題研究所の人口推計によると、令和 7 年（2025）には 39 万 4,000 人、令和 17 年（2035）には約 35　万 3,000 人と、今後 20 年間で約 8 万人の人口が減少すると見込まれている。人口減少と併せて生産年齢人口、年少人口の割合も減少し、老齢人口の割合が令和 17 年（2035）には全体の約 38%にまで増加、少子化・高齢化が進むことが予測されている。

一方、世帯数については、人口減少に転じてからも一貫して増加を続けている。このことは核家族化や単身世帯が増加していることを示しているが、将来的には人口減少の勢いが上回り、世帯数も減少に転じることが予測されている。



人口及び世帯数の推移（「国勢調査」より）



年齢区分別人口構造の推移（「国勢調査」より）

（5） 交通機関

長崎市の幹線道路は中心市街地を起点として放射状に延びており、江戸時代に整備された長崎街道をはじめとする旧街道を踏襲して、国道６路線、主要地方道７路線、一般県道 19 路線が整備されているほか、長崎自動車道により九州内の高速道路網と接続している。平坦地が乏しい地理的要因から、一般交通が都市中心部を通過せざるを得ない状況にあり、幹線道路では慢性的な交通渋滞が生じ、都市機能を低下させてきた。この課題を解決するために、近年、地域高規格道路の整備が進んでおり、ながさき出島道路など長崎南北幹線道路の一部区間が開通したほか、女神大橋の建設をはじめ長崎南環状線の整備も進められている。

江戸時代の主要な街道
（『わかる！和華蘭『新長崎市史』普及版』より）

鉄道は、ＪＲ九州の長崎本線や大村線により福岡市（特急で約１時間 48 分）や佐世保市方面（快速で約２時間）と結ばれているほか、令和４年（2022）の暫定開業に向けて、九州新幹線西九州ルートの建設が進んでいる。暫定開業時は武雄温泉駅での対面乗換方式により長崎博多間が約１時間 22 分となり、全線フル規格で整備されると約 51 分となる見込みである。

九州内の主要都市との間には高速バス網が充実しており、県外とは、長崎駅前から福岡市（約２時間）、北九州市（約３時間）、熊本市（約３時間 30 分）、大分市（約４時間）、宮崎市（約５時間 30 分）、鹿児島市（約５時間 30 分）が、県内では、長崎駅から佐世保市（約１時間 30 分）、大村市（約 45 分）、諫早市（約 45 分）、長崎空港（約 45 分）などがそれぞれ結ばれている。

海に面する長崎市は航路も整備されており、長崎港と伊王島（いおうじま）・高島が高速船（約 30 分）で、長崎港と五島列島がフェリー（福江港まで約３時間）と高速船（福江港まで約１時間 30 分）、茂木港と熊本県天草地方（富岡港）が高速船（約 45 分）、神浦（こうのうら）港と池島がフェリー（約 30 分）と高速船（約 15 分）で、それぞれ結ばれている。

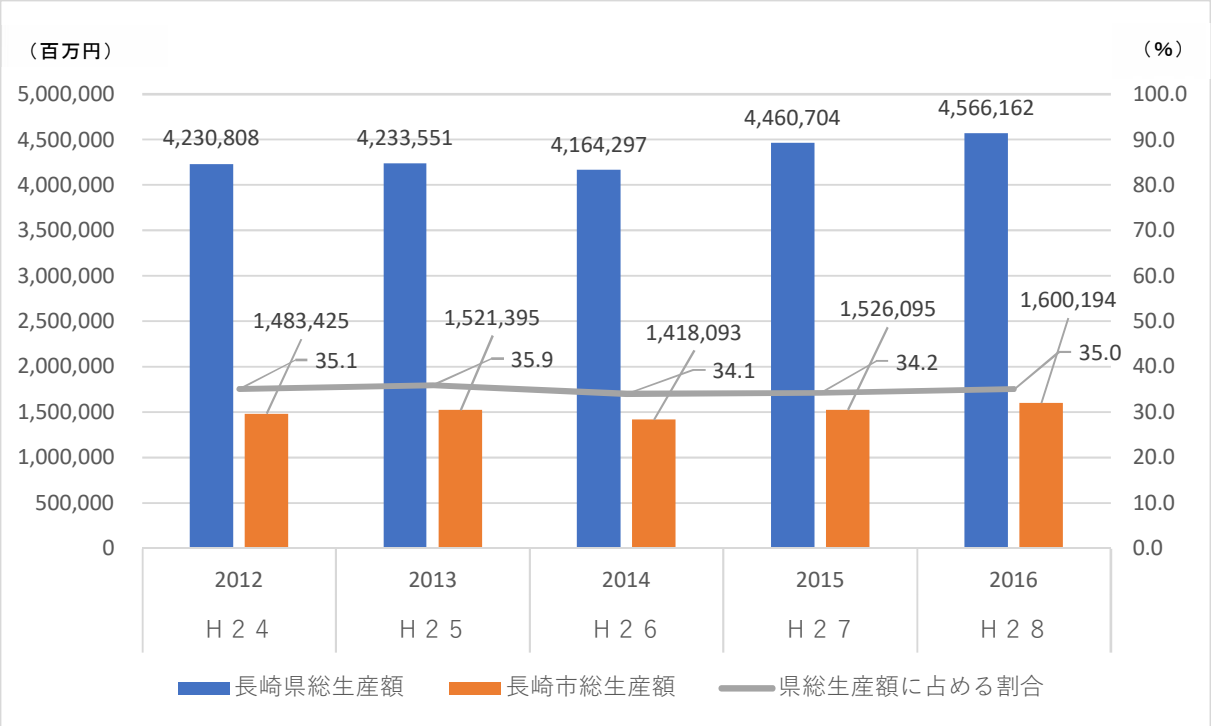
空路は、大村市にある長崎空港から国内線で、首都圏の羽田空港・成田空港（約２時間）、関西圏の伊丹空港・関西国際空港・神戸空港（約１時間）、そのほか名古屋空港（１時間 30 分）、那覇空港（１時間 30 分）、五島福江空港（約 30 分）、壱岐空港（約 30 分）、対馬空港（約 30 分）と結ばれている。また国際線では、中国上海（上海浦東空港）、韓国（仁川空港）、香港と結ばれている。

市内交通は、中心市街地では路面電車や路線バス網が充実しており、市民や観光客の足となっているが、斜面市街地等の公共交通の便が悪い地区の高齢者等は、タクシーを利用する場合も多い。斜面地が多く、中心市街地では公共交通が発達していることから自転車はあまり利用されず、通勤等にはバイクがよく利用されるほか、徒歩で回遊する人も多い。

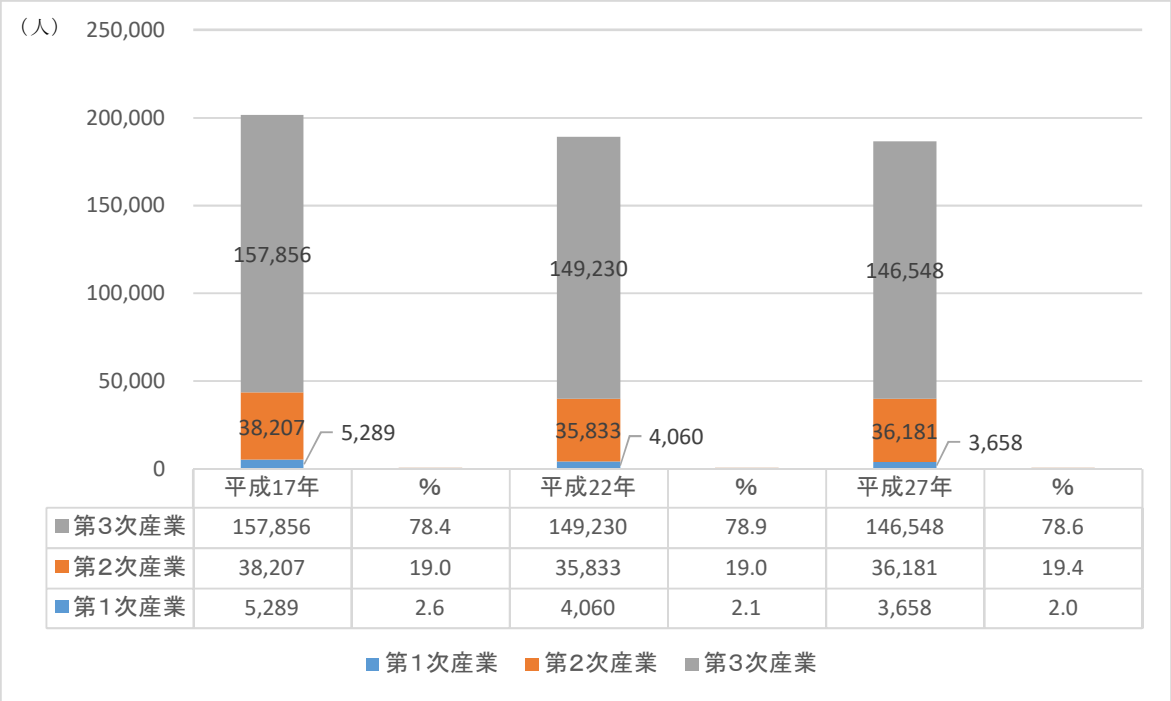
長崎市の交通機関（『長崎歴史文化基本構想』」より作成）

(6) 産業

長崎県の県庁所在地として都市機能が集中する長崎市は、県内総生産額の約 1/3 を占める地域経済の中心地である。平成 28 年（2016）の統計では、長崎県内総生産額 4,566,162 百万円のうち、長崎市総生産額が 1,600,194 百万円で、35.0%を占めている。長崎市は、「造船・水産・観光」を産業の柱としているが、15 歳以上の産業別就業者数を見ると、平成 27 年（2015）において、第 1 次産業が 3,658 人（2%）、第 2 次産業が 36,181 人（19.4%）、第 3 次産業が 146,548 人（78.6%）と、第 3 次産業就業者の割合が高い産業構造となっている。



長崎県内総生産額に占める長崎市の割合（「長崎県市町民経済計算」より）



長崎市の 15 歳以上の産業別就業者数の推移（「国勢調査」より）

ア 水産業

近海に優良な漁場を有する長崎市は、我が国における水産物の集散地として重要な位置を占める全国有数の漁獲量を誇る水産都市である。四季折々に水揚げされる魚種は 300 種を数え、その豊富さもまた全国有数を誇っている。三重地区には、特定第３種漁港である新長崎漁港と長崎魚市場を中心に、水産加工施設、冷凍冷蔵施設、国立研究開発法人水産研究･教育機構西海区水産研究所、長崎県総合水産試験場、長崎大学水産学部東シナ海環境資源研究センターなど、生産・加工・流通関連施設や研究機関が集積する国内有数の水産基地が広がっている。

国内有数の水産基地が広がる新長崎漁港
（長崎県長崎港湾漁港事務所提供）

長崎市は、かつては東経 128 度 30 分以西の東シナ海、黄海を漁場とする以西底曳網漁業の基地として繁栄した。以西底曳網漁業は、昭和 40 年代後半から過剰漁獲による資源の減少や燃料価格の高騰、労働者不足、中国・韓国漁船との競合、国際的な漁業規制等を背景に減船が続き、生産量は大幅に減少しているが、今日でも、すり身の原料を供給するとともに、長崎の行事食として欠かせないカナガシラ（節分）や連子鯛（端午の節句）などを水揚げし、長崎の食卓を支えている。

活魚ブランド「ごんあじ」

沖合漁業は、東シナ海や五島灘を主な漁場として大中型まき網漁業が営まれ、イワシやアジ、サバなどを漁獲している。沿岸漁業は、五島灘に面した西彼海域と橘湾に面した橘湾海域、大村湾海域という三つの特性の異なる海域で行われており、それぞれの海域特性に基づいて、小型底曳網漁業やまき網漁業、定置網漁業、刺網漁業などが営まれるほか、トラフグなどの海面養殖業や煮干し、蒲鉾、塩干品などの水産加工業も盛んに営まれている。また、「ごんあじ」や「のもんあじ」など活魚のブランド化の取組みも行われている。

画像上から「甘鯛」「鯵」「カマス」「ヒラメ」
「魚の美味しいまち長崎ガイドブック」より
※彩色魚譜は『日本西部及び南部魚類図鑑（グラバー図譜）』（長崎大学附属図書館所蔵）より

長崎市では、「魚の美味しいまち長崎の強みを活かした水産業の発展」を目指し、「水産物の付加価値を高める水産加工業の振興」、「地元水産物の消費拡大の推進」、「長崎の魚の魅力発信」などの取組みを進めている。

イ 農業

長崎市の農業は、経営規模が小規模で、耕地が分散し、その大半は急傾斜の山腹に階段状に展開しているのが特徴である。長崎市の農産物や加工品は少量で多品目であるが、豊かな自然に恵まれ、品質・味覚も全国に誇れるものが多くある。

果樹では、茂木地区を中心に、長崎の代表的な果物であるビワの栽培が盛んである。長崎の温暖な気候はビワの栽培に適しており、農林水産統計によれば、その生産量は日本一を誇る。「茂木」「長崎早生（わせ）」などの品種が多く生産されているが、近年は、大果で食味が優れた新品種「なつたより」への改植が進められている。

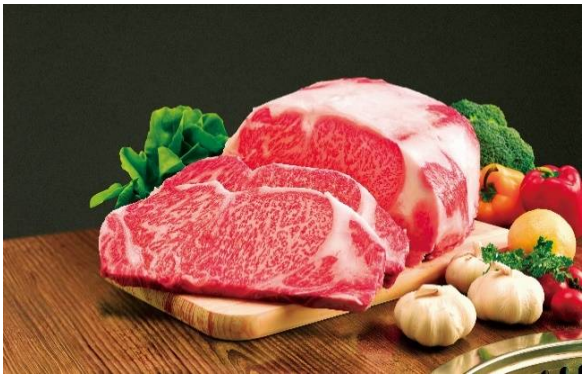
ビワ（なつたより）

野菜類については、施設園芸の主要品目であるイチゴが日吉地区、東長崎地区、琴海（きんかい）地区で栽培されており、現在は大玉で多収性に優れ、食味、品質も高い品種である「ゆめのか」を多く生産している。また、都市近郊農業として生育期間の短い軟弱野菜の産地が形成され、ネギやホウレンソウなどが少量多品目で栽培されているほか、長崎赤かぶ、長崎白菜、紅（べに）大根などの「ながさき伝統野菜」の栽培も行われている。その他、アスパラガスなどの施設野菜も市内各地で生産されている。

イチゴ（ゆめのか）

ながさき伝統野菜

畜産では、三重地区や茂木地区を中心に約 3,600 頭の肉用牛が肥育されている。特に平成 24 年(2012)に開催された「第 10 回全国和牛能力共進会（肉牛の部）」において「内閣総理大臣賞」を受賞して日本一の称号を手にした黒毛和牛「長崎和牛」のなかでも、市内８戸の生産者だけで肥育された長崎和牛は、霜降りと赤肉のバランスが良いのが特徴で、「出島ばらいろ」の名称でブランド化されている。



長崎和牛「出島ばらいろ」

花卉（かき）は、施設栽培によるキク、トルコギキョウ等の切り花栽培が中心である。特に「輪ギク」は、県内外の市場において高い評価を受けている。また、野母崎（のもざき）地区では市内で唯一、スイセンの促成栽培が行われている。

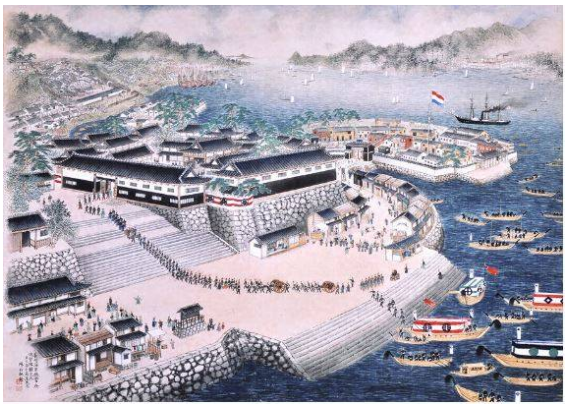
古賀地区で多く栽培される植木はその歴史も古く、ラカンマキなどが庭園木や観賞用として高い評価を受けている。長崎の町家では、長崎くんちの「庭見せ」（かつては「庭おろし」といい、明治時代になると「庭見せ」と呼ばれるようになった。）を考慮した建築と庭づくりを行っており、町家の庭には名園も多かった。古賀地区の植木職人は、長崎の富裕層にそれぞれ得意先を持っていて、庭づくりに腕を振るった。

古賀植木のシンボル「ラカンマキ」

古賀植木は、幕末には長崎の貿易商の手によってオランダや中国にも輸出され、安政年間になりイギリス、フランス、ロシア、アメリカ各国の船も長崎に寄港するようになると、その美しさに魅了された外国人たちも植木を買い求めたという。明治時代になるとシベリア、朝鮮、台湾方面にまで多く積み出され、なかでも中国人向けに手を加えた古賀独特の曲木（まがりき）作りは、他では真似のできないものとして人気を集めた。

ウ 造船業

長崎市の造船業は、安政２年（1855）、幕府が海防強化のためにオランダの指導を得て、最新の海軍学とその技術の習得を目的として長崎に海軍伝習所を開いたことに伴って、安政４年（1857）、我が国最初の洋式の艦船修理工場として長崎港西岸の飽（あく）の浦町一帯に、「長崎鎔鉄所（ようてつしょ）」（後に「長崎製鉄所」と改名、文久（ぶんきゅう）元年（1861）完成）の建設を始めたことを契機としている。

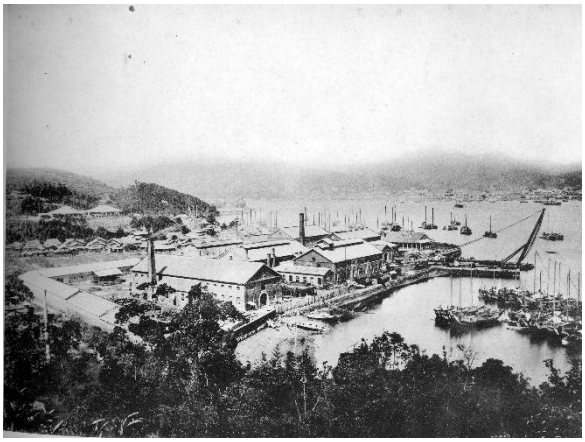


長崎海軍伝習所絵図（公益財団法人鍋島報效会所蔵）

長崎製鉄所は明治維新を経て新政府に引き継がれ、明治４年（1871）、工部省所管の長崎造船所と改称、開国後の日本を近代化するための新政府の工業化政策のもと、官営の造船所として西欧の近代造船技術や機械技術が移転され、長崎は日本の工業化に重要な役割を担う舞台となった。

1868 年（明治初年）の長崎製鉄所（三菱重工業㈱長崎造船所所蔵）

御払下願（三菱重工業㈱長崎造船所所蔵）



1885 年（明治 18 年）ごろの三菱会社長崎造船所飽ノ浦造機工場（三菱重工業㈱長崎造船所所蔵）

日本の近代化を目指し、西欧技術の移転を主眼として推進された工業化政策が、官営事業を民間へ払い下げる方針に方向転換されると、明治 17 年（1884）には、当時、日本最大の海運会社であった三菱会社（現在の三菱重工業株式会社）が施設を借用して事業を継承、これ以降、長崎造船所は三菱によって経営されることとなった。明治 20 年（1887）、三菱への払い下げが許可され、長崎造船所は名実とも

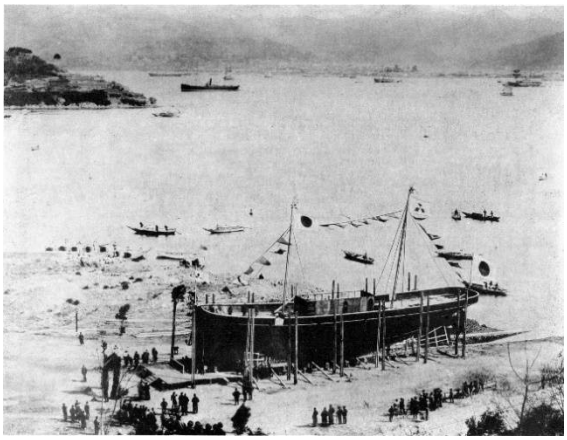
に三菱の所有となり、同年には同社最初の鉄製汽船である「夕顔丸（ゆうがおまる）」が竣工した。

長崎造船所は、外国との技術提携や独自の発明考案等により、明治末期には東洋一の造船所となり、明治42年（1909）には、現在も稼働する重量物を搭載するための150トンクレーン（ハンマーヘッド型起重機）も整備され、大正期に入ると本格的な戦艦の建造にも着手した。

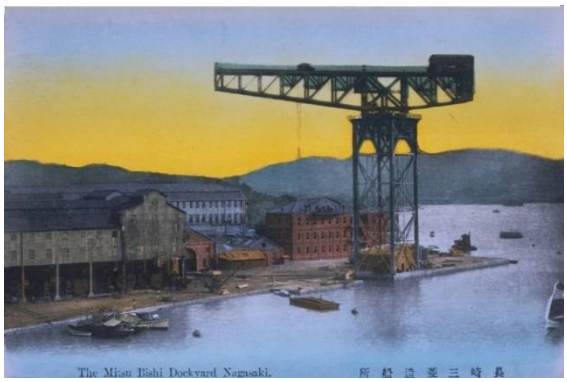
昭和戦前期の長崎造船所は、我が国における商船建造高の50%前後を占め、また大型客船のほか、昭和17年（1942）には戦艦武蔵（むさし）の建造も行われた。戦後には世界的なタンカー需要の増加によって国内はもとより海外からも大型タンカーを受注し、昭和31年（1956）には進水量世界一となった。昭和47年（1972）には、通称「100万トンドック」を有する香焼（こうやぎ）工場も完成し、世界に誇る数多くの船舶を建造するとともに、各種発電プラントの開発製造など、船舶・機械製造を両輪に発展を続けてきた。

近年は韓国や中国の造船業が伸長・台頭するなど激しい国際競争のなかにあって、長崎造船所では高速物流船など高付加価値船の建造に力を入れている。

一方、長崎港内各地に所在する中小造船業は、三菱長崎造船所と関係の深い造船所と漁船建造を主体とする造船所があり、後者は、戦後の水産業の発展とともに、主に底曳網漁船やまき網漁船などを中心に、鋼鉄船を建造して発展した。これら中小造船所は、長崎港東岸の戸町（とまち）から浪（なみ）の平（ひら）町にかけて集中し、対岸の長崎造船所の工場群と併せて港を取り巻く独特の産業景観を形成している。産業の裾野が広い造船業は、今日も長崎市を代表する製造業として、地域経済を支えている。



「夕顔丸の進水」（三菱重工業㈱長崎造船所所蔵）



明治後期から大正期の絵葉書に描かれた
「三菱造船所起重機」（長崎大学附属図書館所蔵）

昭和47年（1972）10月　世界に誇る新鋭設備
香焼工場竣工（三菱重工業㈱長崎造船所所蔵）

三菱重工業長崎造船所飽の浦工場（長崎港に停泊する大型客船は同造船所で建造されたダイヤモンド・プリンセス）

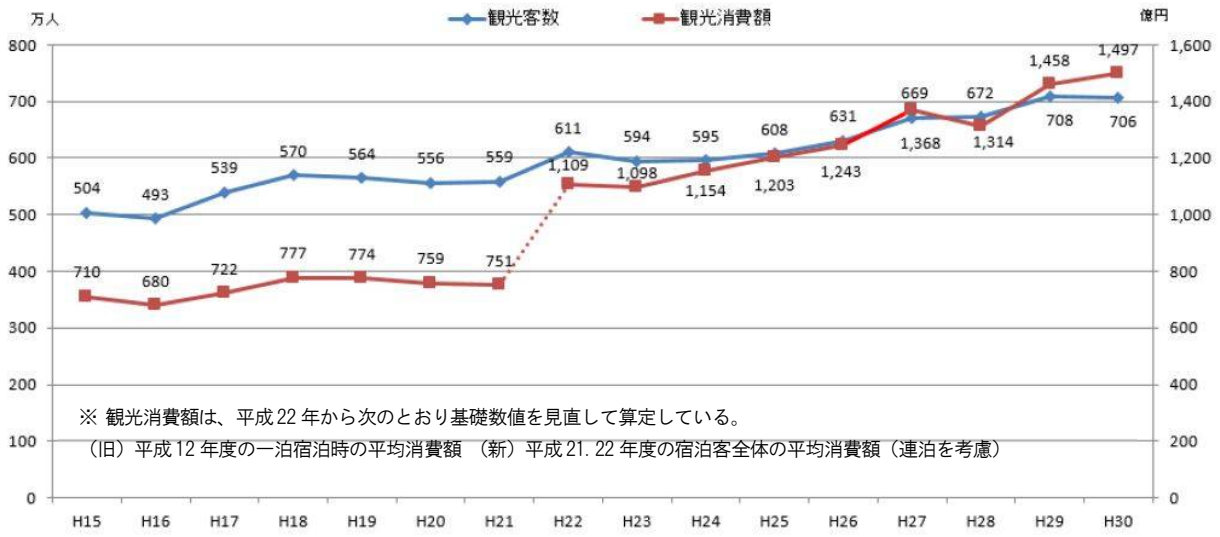
エ 観光業

長崎市は、戦前から異国情緒あふれる観光地として人気があり、戦後は新たに平和学習の地としての役割も加わることになった。長崎を舞台とした映画や歌謡も観光人気を後押しし、高度経済成長期の昭和 32 年（1957）から長崎市の観光客の数は右肩上がりに増えていったが、昭和 57 年（1982）の長崎大水害により減少した。その後、「長崎旅博覧会（旅博）」の開催により観光客数は再び増加したが、旅博後の平成不況の時期は低迷した。

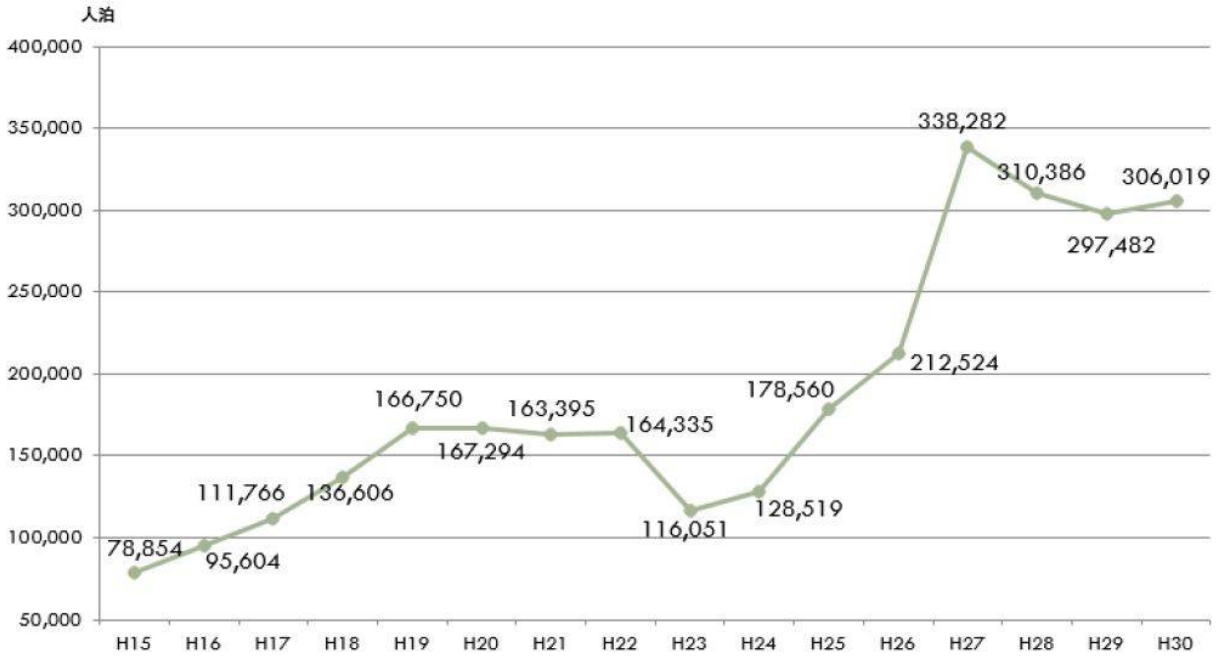
平成 18 年（2006）に開催されたまち歩き博覧会「長崎さるく博’06」を契機に状況は好転し、平成 21 年（2009）の軍艦島クルーズの解禁、平成 22 年（2010）の長崎を舞台にしたテレビドラマ「龍馬伝」の放送、平成 24 年（2012）の世界新三大夜景への認定（一般社団法人夜景観光コンベンション・ビューロー）、平成 27 年（2015）の「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」及び平成 30 年（2018）の「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」のユネスコ世界文化遺産への登録決定、そのほか、国際クルーズ客船の寄港回数の増加等により好況を維持している。

観光客数は、平成 29 年（2017）に過去最高となる 708 万人を記録、平成 30 年（2018）もほぼ横ばいの 706 万人を記録し、同年の観光消費額は、前年比 38 億円増の 1,497 億円で過去最高となった。また同年の主要観光施設の年間入場者数は、グラバー園の約 97 万人を筆頭に、長崎原爆資料館約 67 万人、出島約 54 万人となっており、イベント来場者数は長崎ランタンフェスティバル 106 万人、長崎帆船まつり 27.5 万人を記録した。外国人旅行者も年々増加しており、同年の外国人延べ宿泊客数は約 31 万人である。

平成 28 年（2016）には、北海道釧路市、石川県金沢市とともに訪日外国人旅行者を地方へ誘客するモデルケースを形成する、国の「観光立国ショーケース」に選定され、関係省庁が連携した施策の集中的な支援を受けて、観光資源の磨き上げ、ストレスフリーの環境整備、海外への情報発信などの取組みを官民一体となって進めるなど、多くの外国人旅行者に選ばれる、観光立国を体現する観光地域づくりに取り組んでいる。



観光客数・観光消費額の推移（「長崎市観光統計」より）



外国人延べ宿泊客数の推移（「長崎市観光統計」より）

旧グラバー住宅

長崎帆船まつり

クルーズ客船出航を見送る市民

長崎ランタンフェスティバル

３ 歴史的環境

長崎市は、その立地環境から、古くから眼前の海洋に資源を求め、また海洋を介して他所と交流を行うことによって人々の暮らしが営まれてきた。資源獲得や交通に有利な海浜部を生活の主たる拠点とし、発展と衰退を繰り返しながら、異文化を受け入れ国際色豊かな独自の文化を築いてきた、特徴的な歴史を有している。

（1） 先史・古代

ア 旧石器時代～弥生時代

長崎市域では、山間部において後期旧石器時代から人類活動の痕跡が認められるが、遺跡や遺物が増加するのは、約 6,500 年前から 6,000 年前ごろに海水面の上昇のピークを迎えた縄文海進後からであり、海岸部に形成された浜堤（海岸の汀線付近に形成される砂礫から成る堤状の地形）などが積極的に利用されるようになった。先史時代の長崎は、これまで遺跡の発掘調査例が少なく不明な部分が多いが、地形的制約から農耕を行うための広い平野が限られているため、全国的に水稲耕作が開始された弥生時代以降においても、恵まれた海洋資源を背景とする漁労活動や、狩猟、採集を中心とした生活が営まれたと見られる。また、大陸や南島地域の遺物も出土することから、早くから海上交通による広範囲な交流が行われていたことが推測される。

ナイフ形石器（左）と槍先形尖頭器
（柿泊遺跡）

骨製釣り針（脇岬遺跡）

現在、長崎市内で確認されている遺跡のうち最古のものは、西彼杵半島の山間で発掘された柿泊遺跡である。遺跡は後期旧石器時代から縄文時代早期（約２万年前～約 9,000 年前）にかけて断続的に営まれていたとみられ、遺物はナイフ形石器や台形石器、細石刃、石鏃など、各時代とも狩猟具が中心であり、少人数で移動して狩りをする際のキャンプサイトであったと考えられている。このほか、竿浦町や牧島町、中里町などでも同時代の石器類が発見されているが、当時の様相を再現できるまでには至っていない。

縄文時代前期（約 6000 年前）以降は、西彼杵半島西岸や長崎半島沿岸の砂丘上を生活の主要な拠点とし始めたが、このことを示す遺跡は、出津、三重、式見、手熊、深堀、為石、脇岬など、今日の海岸集落と重なっているものが多い。発掘調査された主な遺跡のうち、長崎半島の先端部に位置する脇岬遺跡では、縄文後期の貝塚から骨製の釣針など多様な漁労具が数多く出土しており、豊富な海洋資源を生活の糧としていたことを物語っている。これは、後述する深堀遺跡や出津遺跡においても同

様であり、石錘(おもり)や石銛、礫器など水産資源の獲得に関連するとみられる石器の出土が多いのが特徴である。

長崎港の入口に位置する深堀遺跡は、縄文前期から現代にいたるまで、ほぼ継続的に人類活動が認められる稀有な遺跡であるが、特に弥生時代中期（約 2,000 年前）を中心とする墳墓群が特徴的である。出土した人骨は、一般の弥生人よりもむしろ縄文人に近い形質的特徴を有しており、同遺跡の弥生人が縄文時代と同様な漁労、狩猟、採集を主体とした生活を継続していたことによるものと考えられる。また、被葬者の着装品として南海産のイモガイで作られた貝輪が出土しているが、外海地区の出津遺跡においてもゴホウラ製貝輪が出土しており、当時の長崎市沿岸域は、南島あるいはその影響下にある地域との交流があったことがうかがえる。

弥生時代後期　貝輪をした女性の人骨
（深堀遺跡　第10号土坑墓）

イモガイ貝輪（深堀遺跡）

イ　古墳～平安時代

平地の少ない長崎市域では、古墳時代（３世紀後半～７世紀）においても、弥生時代と変わらず、生活基盤の主体は漁労活動であったと考えられる。そのため、大きな墳墓はほとんど見られず、石棺墓が中心であり、古墳文化が希薄な地域である。この時代の集落は、市内では現在のところ発見されておらず、墳墓については、深堀遺跡、外海地区の宮田石棺群、牧島の曲崎古墳群など、すべて海に面した場所で確認されている。宮田石棺群は、５世紀代に形成されたと考えられ、副葬品からヤマト政権の最西端で国境警備の任にあたった文官などの墓と推測されているほか、石棺内から出土した石枕から中九州地域との関連が想定され、九州西海岸に沿った文化交流があったことが推測される。また、橘湾上の牧島に５世紀から７世紀にかけて営まれた曲崎古墳群は、100 基を超える積石塚群集墳であり、その規模や立地から、橘湾を拠点として海洋を主たる生活の舞台としていた同族的な海人集団の墓地と推定されている。このように、古墳時代の本地域には、海上交通をおさえ広域に活動する集団が成立していた可能性が指摘される。なお、曲崎古墳群は、積石塚古墳群としては日本最西端に位置し、古墳時代後期の群集墳のあり方を理解するうえで類例の少

古墳時代の石棺墓（深堀遺跡）

橘湾に浮かぶ牧島

曲崎古墳群の 23 号墳（積石塚）

ない重要なものとして、国の史跡に指定されている。

奈良時代に入り律令国家の体制が整うと、九州は西海道とされ、現在の長崎市域は、西海道肥前国のうちの彼杵郡と高来郡に属することになった。「肥前国風土記」によれば、狼煙等により外敵の襲来などの変事を都に急報するための通信施設である烽が、彼杵郡に３か所、高来郡に５か所置かれていたとされ、長崎半島先端の権現山は、その候補地の一つとして想定されている。

平安時代末期に編さんされた「本朝世紀」によれば、天慶８年（945）、高来郡肥最崎の警固所が呉越船（中国船）を発見して兵船 12 隻で追跡し、嶋浦に抑留したとされている。肥最崎は、現在の脇岬一帯と想定され、異国船監視の要衝として公的施設が設置されていたことを示している。

肥前国彼杵荘・伊佐早荘想定図
（平安末～鎌倉時代）新長崎市史より転載

律令制に基づき、全国的に農地を方形に区分した条里制が施行されたが、長崎市域においては、長崎半島の川原地区に「北の坪」、「小坪」などの条里関係地名が残っており、小規模ながら条里地割による耕地が存在していたと考えられる。

観音寺の木造千手観音立像（脇岬町）

天平 15 年（743）の墾田永年私財法の発布以後、貴族や寺社などが所有する「荘園」と呼ばれる広大な私有地が成立し、11 世紀ごろから、地方の開発領主は所領を貴族や寺社に寄進してその保護を求め、各地に寄進地系荘園が増加していった。長崎市域においても、平安時代末までに彼杵荘、伊佐早荘が成立、このうち伊佐早荘に含まれた長崎半島のほぼ全域は、仁和寺の末寺である肥御崎寺の荘園が広がっていたとされる。肥御崎寺の遺構の一つと想定される脇岬町の観音寺には、藤原時代後期の特徴がみられる重要文化財「木造千手観音立像」が祀られており、西国における藤原文化の名残を伝えている。

鷹ノ巣石鍋製作所跡（神浦下大中尾町）

このほか、長崎市域における古代から中世にかけての特徴的な遺跡として、西彼杵半島・長崎半島の山間部には、滑石製石鍋の製作遺跡が分布している。滑石はモース硬度１の軟質の岩石であり、加工がしやすく保温性に富む特徴を持つ。滑石製石鍋は、10 世紀末ごろから 16 世紀にかけて製作・使用され、東北から南島地域まで広く流通した厨房具であり、滑石岩脈が発達する西彼杵半島は、我が国最大の生産地であった。長崎市域では、外海神浦地区の市指定史跡「鷹ノ巣石鍋製作所跡」がその代表例であり、滑石が露頭する岩壁には石鍋の粗形を剥ぎ取った痕跡などが残り、石鍋の製作工程を示す貴重な遺構である。

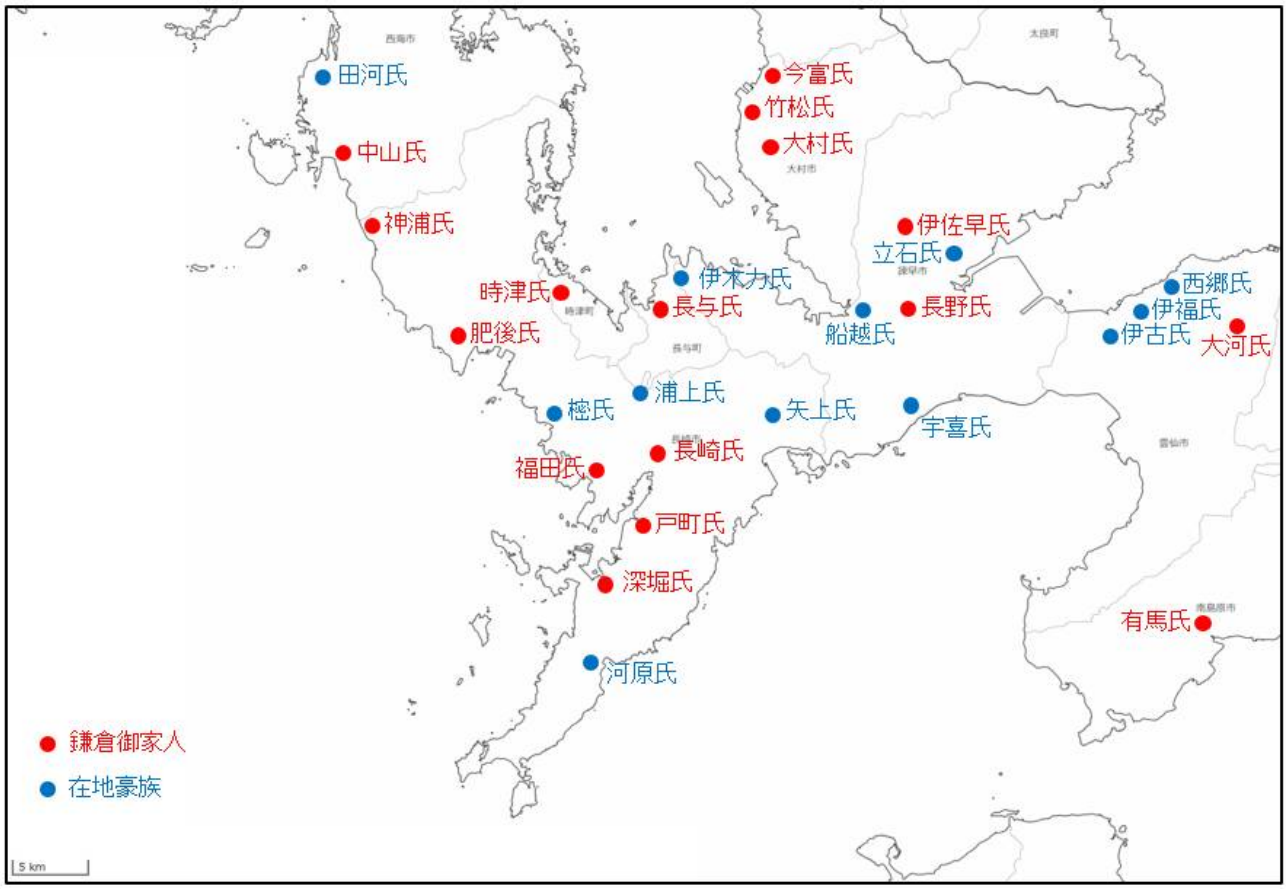
（2） 中世

ア 鎌倉時代～戦国時代

平安時代中期以降、律令国家の崩壊による社会情勢の中から武士勢力が台頭するが、後半ごろになると、長崎市域においても、戸町氏や長崎（永崎）氏など各津浦を基盤とする在地豪族が史料で確認されるようになる。鎌倉時代になると、これら在地豪族が地頭・御家人化して武士団を形成する一方、東国御家人の移住・土着もみられ、しばしば領地をめぐって紛争が起こっている。

彼杵荘の荘官であった平包守の子兼定は、文治２年（1186）に源頼朝から生（老）手・手隈両村（現在の福田本町・手熊町）の地頭職を安堵され、肥前国御家人となった。後の福田氏である。また、建長７年（1255）には、上総国伊奈荘深堀を本拠とする東国御家人である深堀能仲が戸町浦の地頭に任ぜられ、その子時光の代に移住土着した。新勢力である深堀氏は、鎌倉幕府の勢力を背景として、領地を巡って戸町氏をはじめとする在地豪族と争い、その抵抗を排除して所領を拡大していった。

鎌倉時代末期、14 世紀後半ごろにおける現在の長崎市とその周辺には、長崎（永崎）氏、戸町氏、福田氏、深堀氏、樒氏、河原氏、長与氏、時津氏、伊木力氏、大村氏、神浦氏、田河氏らが割拠していた。元弘３年（1333）、鎌倉幕府が滅亡し、建武の親政を経て南北朝の動乱の時代を迎えると、彼杵荘の武士たちは南北朝の形勢の推移に応じて軍事行動に参加し、彼杵一揆と呼ばれる同盟を結んで、正平 18 年（1363）には北朝方に、応安５年（1372）には南朝方に対抗した。



中世における御家人及び豪族の分布図

南北朝の動乱は、明徳３年（1392）の南北朝の合体によって鎮静化したが、その後の応仁の乱の勃発により、再び全国は戦乱の時代へと入っていった。15 世紀後半には、現在の長崎県北部で松浦氏が、南部では大村氏、有馬氏が台頭し戦国大名に成長した。有馬氏の勢力が長崎市域とその周辺に及ぶと、在地武士たちのほとんどは没落し、深堀、福田、長崎の三氏が戦国時代を生き抜くこととなった。長崎市内には、このような中世の軍事的な緊張関係を物語る山城跡が、20 か所以上確認されている。築城時期は、一部に南北朝期のものも見られるが、大半は戦国時代のものと考えられている。立地的には、在地武士の基盤であった津浦を見下ろす高台に位置する山城が多く、深堀氏の俵石城や長崎氏の鶴城・焼山城、福田氏の福田城などが知られる。

イ 長崎開港から公領へ

15 世紀から始まった大航海時代、世界の海に進出したポルトガルは、16 世紀半ばには日本近海に到達する。天文 18 年（1549）、イエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルは中国船に便乗し、薩摩（鹿児島）に上陸、日本にキリスト教を伝えた。ザビエルは、翌天文 19 年（1550）には平戸を訪れ、領主松浦隆信の許可を得たことから、以後、平戸はポルトガル貿易とキリスト教布教の拠点となり、毎年のようにポルトガル船が入港するようになった。しかし、永禄４年（1561）、ポルトガル商人と日本商人との間で暴動が起こり（宮の前事件）、その対応に不満を持ったポルトガル人は、平戸を退去した。

長崎に最初に建てられた教会跡に設置された
ルイス・アルメイダの布教記念碑（春徳寺）

大村領主大村純忠は、永禄５年（1562）、領内の横瀬浦（現在の西海市）をポルトガル貿易港として開港した。翌年には自らキリスト教に入信して日本最初のキリシタン大名となり、自領内でのキリスト教の信仰を奨励したが、横瀬浦は豊後の商人らによって夜襲を受け、わずか１年余りで廃港となった。純忠は、永禄８年（1565）に領内福田浦を開港し、さらにより安全な港として、元亀元年（1570）イエズス会宣教師と協定を結んで長崎を新たな貿易港に定めた。

南蛮船の入港の様子（「南蛮人来朝之図」長崎歴史文化博物館収蔵）

元亀２年（1571）、ポルトガル船の入港にあわせ、純忠は家臣朝長対馬守を長崎に派遣して、長崎港内に突き出た岬の先端から新たな都市建設を開始し、まず、大村町、島原町、平戸町、横瀬浦町、外浦町、文知町の６か町を造成した。岬の突端には教会が建てられ、ポルトガル貿易の拠点、キリスト教布教の拠点として整備された長崎は、以降、貿易の活発化と人口の増加に伴い、町が次第に拡張され、国際貿易都市として順調に歩み始めた。

天正４年（1576）、佐賀の龍造寺隆信は、肥前国全域の征服を目指し、現在の長崎県南部に侵攻を開始、開港間もない長崎も攻撃の対象となった。龍造寺氏による長崎譲渡の要求を恐れた純忠は、ポルトガル貿易による利益と領主権、そして自身の安全の保証を得るため、天正８年（1580）、長崎と茂木を教会領としてイエズス会に寄進した。また、キリシタン大名であった島原領主有馬晴信も、天正 12 年（1584）、龍造寺隆信を島原の沖田畷で討ち破り、その戦勝を感謝して、当時、自領であった浦上をイエズス会に寄進した。

天正 15 年（1587）、島津氏を下して九州平定を終えた豊臣秀吉は、博多において伴天連追放令を発布し、イエズス会領となっていた長崎、茂木、浦上を没収した。大村喜前や有馬晴信が自領であったと申し入れたため、秀吉は一旦これらを喜前らに返還したが、翌天正 16 年（1588）には再度没収、直轄領として、鍋島直茂（後の佐賀藩祖）を長崎代官に任じた。直轄領となった長崎は、地子銀（土地税）を免除された内町と、地子銀が免除されなかった外町に区分され、内町は、天正 16 年（1588）当時は 10 か町であったが、文禄年間（1592～1596）には増加して 25 か町（後に 23 か町となる）となった。文禄元年（1592）、秀吉は、直茂の後任として、朝鮮出兵に際して肥前名護屋城の普請を務めるなどした側近の寺沢広高に長崎奉行を下命、長崎統治にあたっては、奉行より有力町人の高木勘左衛門、高島了悦、町田宗賀、後藤惣太郎が「頭人」（後の町年寄）に任じられ、内町支配に組み込まれた。一方、外町は、文禄２年（1593）ごろに中島川沿いに造成された材木町、本紺屋町、袋町、酒屋町などがその始めとされるが、文禄元年（1592）に村山等安が長崎代官に任じられて外町を支配していることから、文禄元年当時、町数は相当増加していたものと考えられる。

なお、秀吉は、キリスト教の宣教を禁止する方針を出したものの、一方で貿易による利益を重視してポルトガル貿易を推進したため、伴天連追放令は徹底されなかった。長崎においても、教会や関係施設は存続し、天正 19 年（1591）にはサン・ジョアン・バブチスタ教会、文禄３年（1594）には山のサンタ・マリア教会なども新設された。しかし、スペイン船の漂着事件をきっかけとして、宣教師がスペインの領土拡大の一端を担っているとの報告を受けた秀吉は激怒し、京都・大坂で公然と布教を行っていたスペイン系フランシスコ会士６名を含む計 26 名のキリシタンを捕縛し長崎へ連行、慶長元年 12 月（1597 年２月）、西坂の丘で処刑した。いわゆる「日本二十六聖人」の殉教事件であるが、これは、我が国最初の本格的なキリシタン弾圧となった。

日本二十六聖人殉教地の記念碑（西坂公園）

(3) 近世

ア 近世長崎の統治

慶長３年（1598)、豊臣秀吉が没し、慶長５年（1600）の関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は江戸幕府を開き、長崎は引き続き直轄領とされた。慶長８年（1603)、幕府は、長崎奉行に旗本小笠原一庵を、長崎代官には引き続き村山等安をそれぞれ任命した。はじめ、長崎奉行は内町25 か町（後に23 か町）を支配し、外町43 か町（後に 54 か町）と郷村地は長崎代官が支配していたが、元禄 12 年(1699)以降は内町・外町のすべてを奉行が支配することになった。長崎奉行は、御用物の購入、外国貿易の管理、キリシタンの探索、西国大名の監視、長崎港とその周辺の警備、長崎町人(町方)・寺社(寺社方)等の監督、外国使節の応接、風説書などによる海外情報の収集・把握等を職務とし、これら長崎奉行の職掌の実務は地元の町人などからなる地役人が処理した。地役人は町年寄を筆頭に、町方を担当した町乙名や町日行使、通訳にあたった唐通事、阿蘭陀通詞、外国貿易を担当した長崎会所の役人や各種目利、警備を担当した遠見番や船番、唐人番などが置かれたが、時代とともに人数が増加、役職も細分化され複雑なものとなった。

長崎代官は、元和５年(1619)に村山等安が失脚後、末次平蔵政直が任命されたが末次家も四代で失脚、元文４年(1739)に御用物役の高木作右衛門忠与が任命され、以後、高木家が幕末まで世襲した。長崎代官の支配地は、幕府直轄領のうち長崎村、浦上村山里掛、同村淵掛であったが、明和５年(1768)、作右衛門忠興の時代になると、高浜村、野母村、古賀村、日見村、茂木村、川原村、樺島村が加えられ、10 か村となった。

長崎の周囲には、幕府直轄領のほか、大村藩領や佐賀藩領の村々があった。現在の長崎市域のうち、浦上北部・琴海地区・福田以北の五島灘沿岸地域は大村藩領、東部の矢上・戸石地区は佐賀藩諫早領、幕府直轄領の川原・高浜・野母を除く長崎半島一帯及び神の島、香焼、伊王島、高島などの島しょ部は佐賀藩深堀領にそれぞれ属していた。これらの村々は、都市長崎への食糧・日用品などの物資の供給や長崎警備などのうえでも大きく関係し、また、互いに影響を与え合いながら、各藩領固有の文化を形成していった。

イ キリシタン禁制と長崎の都市改造

家康は当初キリスト教を黙認していたが、次第に禁教へと傾いていった。長崎は、江戸幕府が開かれてもしばらくは、キリシタンの町として繁栄し、慶長６年（1601）にはサン・ミゲル教会、同８年（1603）にサン・チアゴ教会とサンタ・クララ教会、同 11 年（1606）ごろにサン・アントニオ教会とサン・ペトロ教会が建設された。また、各地を追われたキリシタンは長崎に集まるようになり、同 15 年（1610）にサント・ドミンゴ教会とサン・ロレンソ教会が建設され、その後もサン・フランシスコ教会やサン・アウグスティン教会など各派の教会が建ち並んだ。しかし、慶長 18 年 12 月（1614

サント・ドミンゴ教会跡出土
花十字紋瓦（キリシタン瓦）

年１月)、幕府は全国に禁教令を発布し、長崎の教会は次々に破却された。

教会の破却後、幕府はキリシタンの探索を徹底するため、寛永３年（1626）ごろより踏絵、寺請などを制度化した。特に寺請制度は、住民全てに寺院の檀家になることを義務づけ、住民は宗旨改踏絵帳に記載されて管理されることとなった。長崎では、幕府の保護もあり、キリスト教禁教政策の一環として、市街を取り囲む立山や風頭山の麓に寺社が建てられた。寺院は、寛延３年（1750）までに 66 か寺を数え、市街中心を流れる中島川には、寺社と市街地をつなぐ眼鏡橋をはじめとする石造アーチ橋が、多数架橋された。

また、寺院のほかに神社も次々に創建されたが、特に寛永２年（1625）に創建された諏訪神社は長崎の氏神とされ、秋の大祭「長崎くんち」では全ての町の住民に氏子として踊りや出し物を奉納することが義務づけられた。寛文３年（1663）に起こった大火災を契機として、道路や町割など、現在につながる市街地の骨格が整備され、長崎は総町 80 か町に区分された。寛文 12 年（1672）から、各町は７年ごとに長崎くんちに踊りを奉納することとなり、オランダ商館のあった出島町を除き、くんち事始めの縁起にちなむ花街である丸山町と寄合町が毎年奉納を、残る 77 か町を７つに分け 11 か町が７年に１度、奉納を行うこととなった。こうして長崎は、教会の町から寺社の町へと都市の大改造が行われ、その景観は一新された。

なお、禁教政策による弾圧によって日本においては宣教師が不在となったが、浦上や外海ではキリシタンが共同体を組織し、厳しい取り締まりのなか、潜伏キリシタンとして信仰を継続した。

ウ 国際貿易港長崎

徳川家康は、東南アジア諸国に使者を送り外交関係を結び、慶長９年（1604)、西国の有力大名や豪商に海外渡航の朱印状を発布し、外国貿易を奨励する朱印船制度を実施した。朱印船は必ず長崎港を発着することと定められており、長崎は朱印船貿易の拠点として賑わった。また、末次平蔵や荒木宗太郎など長崎の有力者たちも、朱印船貿易家として東南アジアに盛んに貿易船を派遣した。

しかし、幕府は禁教令発令後、キリシタン禁制と併せて貿易の統制や外国貿易の制限、いわゆる「鎖国」に向けた政策を進めていった。元和２年（1616)、中国船以外の入港を平戸と長崎に限定、寛永元年（1624）にはスペイン船の来航を禁止した。また、このころから日本人の外国貿易にも制限が加えられるようになり、同 12 年（1635）までに日本人の海外渡航と海外からの帰国を禁止、中国船の入港も長崎一港に制限された。

出島は長崎の岬の突端に突き出した扇形の人工島で、寛永 13 年（1636）に完成すると、市中のポルトガル人はすべてここに収容された。しかし、翌年の島原・天草一揆によって、ポルトガル人によるキリスト教伝播に対する警戒を強めた幕府は、同 16 年（1639)、ついにポルトガル船の来航を禁止してポルトガル人を国外追放処分とした。以後、外国貿易はすべてオランダと中国に限定され、同 18 年（1641）には平戸にあったオランダ商館を、空き地となっていた出島へ移転、これより幕府直轄による対外貿易は長崎に限定されることになった。

長崎の岬の突端につくられた出島　「出島図」（長崎歴史文化博物館収蔵）

また幕府は、オランダ、中国以外の外国船の長崎港への侵入に備え、寛永 18 年（1641）以降、福岡藩と佐賀藩に一年交代で長崎港を警護させた。また、慶安元年（1648）には戸町、西泊に番所を設けたのをはじめとして、長崎港周辺に台場や烽火台（ほうかだい）などの海防関係施設が整備された。

貿易港が長崎一港に制限されてからも、しばらくは来航した中国人は長崎市中に宿泊することが許されていた。このなかには投化（帰化）する者も現れ、その家系から唐通事（とうつうじ）が多く輩出された。また、中国人は出身地ごとに「唐寺（とうでら）」と呼ばれた興福寺や崇福寺を創建、隠元（いんげん）をはじめとする多くの唐僧を招き、黄檗（おうばく）文化がもたらされた。しかし、清朝の海禁政策（遷界令）が廃止されると、長崎に来航する中国船の数は激増、密貿易が横行した。そこで、幕府は、元禄２年（1689）、十善寺郷（現在の館内町とその一帯）に唐人屋敷を造成、中国人を収容した。また、元禄 15 年（1702）には、唐人屋敷前面の海面を埋め立て、中国船の積荷を管理する新地蔵所が築造された。

新地蔵へ荷揚げする様子
（「唐館図絵巻」長崎歴史文化博物館収蔵）

なお、長崎と全国を繋ぐ主要な道として、長崎から小倉までを結ぶ長崎街道が整備されていた。長崎街道は、江戸や大坂につながり、海外貿易の品々を運んだほか、長崎奉行をはじめ諸大名やオランダ商館長、遊学生などが往来する人と物の交流の道として機能し、沿道の宿場町や集落の発展にも影響を与えた。

長崎は、幕府が直轄する唯一の国際貿易港として整備され、安政６年（1859）の開国までの 218 年間、ヨーロッパやアジアとの経済、学術、文化交流の拠点として、日本と世界を繋ぐ重要な役割を果たした。また、海外貿易によりもたらされた経済的繁栄を享受し、国際色豊かな都市文化を形成していった。

円山応挙筆「長崎港之図」（長崎歴史文化博物館収蔵）

エ 近代化の先駆け

江戸時代、西洋科学の流入は、出島を通じて輸入された洋書(蘭書)が中心であり、阿蘭陀通詞（おらんだつうじ）がその研究や紹介に大きな役割を果たしていた。長崎では、18 世紀後半以降、ツュンベリーやシーボルトなどオランダ商館医による近代西洋科学の直接的な指導・教育も実施され、最新の西洋科学や文化を学ぶため、全国から多くの若者が訪れていた。

嘉永６年（1853)、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーの浦賀来航など、欧米列強によって開国がせまられるなか、幕府は海防の必要性を痛感、オランダの指導のもと、安政２年(1855)海軍伝習所を長崎奉行所西役所内に設置、オランダから献上されたスンビン号（観光丸）を練習艦とした。海軍伝習所は、幕臣や雄藩藩士に航海術や造船術、砲術などを教育したほか、関連諸科学や技術の導入を目的とする様々な施設が設けられた。なかでも、第二次伝習所教官として来日した技師ハルデスの指揮により、幕府の有する軍艦の修理を行うため、安政４年（1857)、長崎港西岸の飽ノ浦に

長崎鎔鉄所（ようてつしょ）の建設が開始された。長崎製鉄所と改名され文久元年（1861）までにほぼ竣工、我が国最初の近代的装備を持った工場であり、のちの長崎造船所の源流となった。また、医学伝習所教官ポンペの働きかけにより、文久元年（1861）、日本最初の西洋式近代病院として長崎（小島）養生所が開院、ポンペはここで実践的な最新の西洋臨床医学を教授し、維新後に活躍することになる多くの人材を輩出した。

オ 国際貿易港としての再出発

安政５年（1858）、幕府は米、蘭、露、英、仏の５か国と修好通商条約を締結、翌年から長崎は、箱館（函館）、神奈川（横浜）とともに新しい国際貿易港として開港場に設定された。これにより、長崎は鎖国政策下における海外貿易港としての特権的位置を失い、新しい国際貿易港として再出発することになった。

安政４年（1857）、幕府は、開国後の外国人居留地の予定地として大村藩領戸町村を直轄領とし、安政６年７月（1859.8）から居留地の造成に着手した。居留地造成は３次にわたって実施され、元治元年（1864）にほぼ完成したが、それより先、第１期造成工事の完了した万延元年（1860）以降、地割された土地は外国人に貸し出され、次々に洋風建築が建設されていった。

慶応３年の長崎居留地図「長崎外国商館の図（部分）」（長崎大学附属図書館経済学部分館所蔵）

居留地は、面積約 11 万坪、上等地、中等地、下等地に分かれ、大浦や下り松など平地の上等地、中等地には商社やホテル、工場などが、山手の下等地には住宅や教会などが建てられた。大浦海岸通りや山手には、構造的、意匠的に優れた本格的な洋風建築が建てられた。これらは南山手町の大浦天主堂や旧グラバー住宅、旧リンガー住宅、旧オルト住宅、東山手町の十二番館など現存する建物もあ

る。これら初期洋風建築の建設には、外国人設計者が参加したものと考えられるが、日本人技術者がこれらの建設に携わることによって、洋風建築の技術を習得していったものと思われる。また、居留地内の整備においては、街区、道路、舗装、下水などに近代的な土木技術が適用され、併せて西洋風のまちなみが形成された。

開港後、外国貿易の中心は、次第に横浜・神戸に移っていったものの、良質な石炭の補給基地であり、大陸に近いという立地特性から、長崎には多くの外国船が入港した。居留外国人は、貿易をはじめとする様々な商業活動を展開し、生活や教育など様々な面において西洋風の様式が持ち込まれた。

また、幕末、居留外国人を対象として居留地内にキリスト教の教会が建設されたが、このうち、パリ外国宣教会により建設された大浦天主堂は、慶応元年（1865）、浦上の潜伏キリシタンがプティジャン神父に自らの信仰を告白した「信徒発見」の舞台となった。これを契機として、公然と信仰を表明するようになった潜伏キリシタンに対し、各地で「浦上四番崩れ」に代表される摘発と激しい弾圧が起こったが、この弾圧に対して、日本政府は欧米各国から大きな批判を浴び、明治６年（1873） に禁教の高札が撤廃され、以後、日本におけるキリスト教の信仰は黙認された。

(4) 近代（明治時代～昭和 20 年）

ア 長崎市の成立と拡大

慶応４年（1868）１月、鳥羽伏見の戦いにおける幕府方の敗戦などを受け、長崎奉行河津佑邦は長崎を退去し、長崎奉行所は 265 年にわたる長崎支配の幕を閉じた。その後、明治政府は行政機関として長崎に長崎裁判所を設置、同裁判所は同年５月長崎府に改称され、さらに明治２年（1869）６月、長崎県に改称された。明治４年（1871）７月の廃藩置県後、府県の序列では長崎県は全国６位に位置付けられた。

明治 11 年（1878）、郡区町村編制法が施行され、市街一円は第一大区から長崎区を経て、同 21 年（1888）の市制・町村制の公布を受け、翌 22 年（1889）４月１日、長崎市が誕生した。戸数は 9230 戸、人口５万 4502 人、市域は７平方キロメートルほどであった。明治 31 年（1898）には上長崎村、下長崎村、浦上淵村のほぼ全域と、浦上山里村や小榊（こさかき）村の一部が編入されるなど、その後も市域は拡大していき、大正９年（1920）の第 1 回国勢調査では、人口 17 万 6534 人で全国第７位、九州第１位の都市であった。

本河内高部水道施設（堰堤）

また、明治 27 年（1894）の日清戦争後は、ロシアとの間で軍事的緊張が高まり、長崎港と港内造船施設の防衛のため要塞地帯に指定され、明治 33 年（1900）、長崎要塞司令部が設置された。

西日本における重要都市のひとつであった長崎では、いち早く近代的都市への改造が推進され、明治 15 年（1882）から開始された第１次長崎港湾改良工事を皮切りに開発が進み、出島の南側や浦上川河口部での埋め立てによって臨海部の平地が拡大した。また、下水道や近代水道施設（ダム）、道路、橋梁などが各地で整備された。これらの建設にあたっては当時の先進技術が導入されており、我が国の土木技術史においても重要である。

このうち、明治 24 年（1891）に完成した本河内（ほんごうち）高部水道施設は、ダム式水道施設としては我が国最初のもので、市街地及び外国人居留地に給水された。また、主要道路として長崎への主要な入口であった急峻な日見峠は、明治 15 年（1882）に馬車や荷車のための日見新道が、さらには大正 15 年（1926）自動車に対応した日見トンネルが整備された。このほか、大正 13 年（1924）大型船の係留施設として出島岸壁が完成、大正 12 年（1923）から開始された上海航路の発着地として賑わった。

戦前の日見トンネル（個人蔵）

イ　貿易都市から産業都市へ

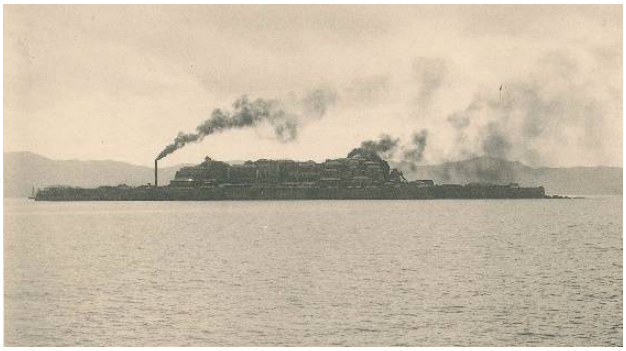
明治に入ると外国貿易の中心は大都市を控えた横浜、神戸に移っていき、国際貿易都市としての長崎には陰りが見えてきたが、幕末から盛んになった造船業、石炭産業の発展により、産業都市へと町の姿を変えていった。

西洋技術を導入した修船施設（小菅修船場跡）

長崎における近代造船業は、文久元年（1861）、飽の浦に完成した長崎製鉄所から始まる。長崎製鉄所は明治維新後、新政府の管理下に置かれ、また、明治元年 12 月（1869．1）、薩摩藩とトーマス・ブレーク・グラバーの出資により造られた小菅修船場もその翌年に買収されると、あわせて明治４年（1871）に工部省の経営となった。その後、工部省所管のもと経営は順調に伸びていったが、明治 17 年（1884）、工場全部を官有物借用の名義で民間に払い下げることとなり、岩崎弥太郎の三菱会社に経営が移され、同 20 年（1887）、払い下げ代金の完納により、造船所は名実ともに三菱の所有となった。明治 26 年（1893）、三菱合資会社三菱造船所の名称となり、同 31 年（1898）には 6,000 トン級の船舶を完成させるほどの規模に整備され、以後は軍艦建造にも進出、明治 37 年（1904）ごろには東洋一の造船所に発展していた。第二次世界大戦時には、戦艦武蔵の建造や、兵器製作所で大量の魚雷が製造された。

大正時代の三菱長崎造船所（個人蔵）

西彼杵炭田の豊富な石炭資源を埋蔵する長崎港外の島しょ部では、幕末から明治初期にかけて洋式採炭技術がいち早く取り入れられ、石炭の量産体制が確立された。慶応４年（1868）に佐賀藩とグラバーとの共同経営で、日本で最初の蒸気機関を導入した高島の北渓井坑を皮切りに、端島や中ノ島などにも炭坑が開かれ、短期間のうちに大規模な炭鉱施設に発展した。長崎地方の主要産業として成長した石炭産業は、明治前期においては蒸気船の燃料供給に大きく貢献し、東アジア地域における海運網を支えた。また、明治中期以後は国内製鉄業に盛んに供給され、我が国の重工業の発展にエネルギー面で多大な役割を果たした。



大正時代の端島炭坑（個人蔵）

(5) 現代（戦後から現在）

ア 原爆被災と平和都市としての発展

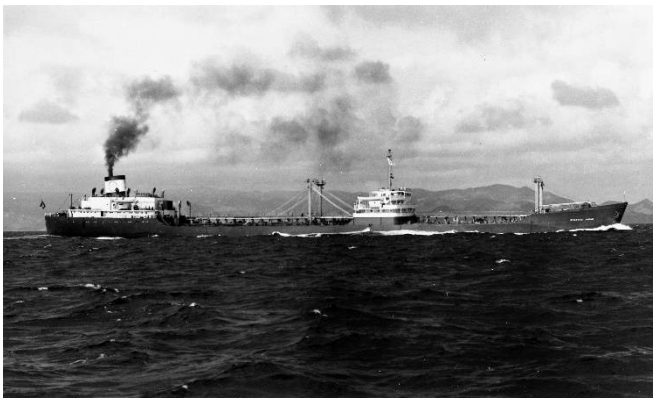
昭和 20 年（1945）８月９日、長崎に原子爆弾が投下され、浦上地区を中心とする市街地は一瞬にして壊滅的な被害を受け、当時 24 万人の市民のうち死傷者は約 15 万人に及んだ。戦後復興に向けた都市基盤の整備は、昭和 24 年（1949）、国会で「国際文化の向上を図り、恒久平和の理想を達成する」との平和都市建設への理念を謳った長崎国際文化都市建設法が成立したのを受けて浦上地区を中心に進められ、昭和 26 年（1951）には爆心地周辺において平和公園が整備された。また、昭和 30 年（1955）には、被爆の実相を訴える世界平和と文化交流のための記念施設として長崎国際文化会館、原爆資料館が整備され、平和公園内には平和祈念像が建立された。毎年８月９日には、平和祈念像前において、原爆犠牲者を慰霊し、あわせて世界恒久平和の実現を祈る長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典が挙行されている。

きのこ雲（長崎原爆資料館所蔵）

平和祈念像除幕式（『新長崎市史　第４巻　現代編』より）

イ 産業の推移

戦時中は全国有数の軍需都市であった長崎は、戦後は造船、石炭、水産、観光などが主要産業となった。造船業は、戦後の世界的なタンカーブームに乗り、国内はもとより海外からも大型タンカーを受注・量産し、世界一の進水量となった。また、長崎湾内の中小造船所の多くは、主に漁船などを中心に貨物船や旅客船など様々な船を建造し、造船業は長崎の基幹産業として発展した。深堀・香焼（こうやぎ）島間の海面埋め立てによる臨海工業団地も形成され、昭和 47 年（1972）には、通称「100 万トンドック」を有する香焼（こうやぎ）工場も完成した。その後、二度の石油危機による造船不況や中国・韓国の台頭による競争の激化に伴い、造船業を中心とする長崎の製造業は厳しい状況が続いているが、近年では、発電プラントなどの機械装置も製作している。



スタンバック・ジャパン　1953 年（昭和 28 年）３月竣工
戦後、長崎造船所技術の優秀さを世界に示した画期的な大型タンカー（三菱重工業㈱長崎造船所所蔵）

一方、日本経済の復興を支える重要なエネルギー産業であった炭鉱業には、戦後、傾斜生産方式によって優先的に資金が投入され、昭和 25 年（1950）から始まった朝鮮戦争による特需を受け、昭和 30 年代初めには、出炭量が第二次世界大戦前の水準に戻った。長崎においても、高島、端島を中心に雇用を増やして出炭量を伸ばしており、昭和 30 年代後半には高島町全体で人口約 22,000 人を数え、このうち端島は人口約 5,000 人を数え、人口密度は当時の東京都区部の約 9 倍と言われた。しかし、高度経済成長期のエネルギー転換に伴い、昭和 40 年代以降、急速に縮小が進み、同 47 年に伊王島炭鉱、同 49 年に端島炭鉱が閉山、同 61 年（1986）には高島炭鉱も閉山した。なお、戦後から出炭を開始した池島炭鉱は、平成 13 年（2001）まで稼働し、閉山後は石炭技術センターを経て、現在は炭鉱施設の公開見学が行われている。

水産業は、戦後の食糧不足の解消に向け、昭和 20 年（1945）に長崎魚市組合が設立され、水産企業の開設やトロール漁・底曳網漁の再開、大消費地向けの鮮魚輸送列車の運行など、長崎経済の本格的復興にいち早く寄与した。また、水産加工業も食糧事情改善のために増産に励み、急拡大していった。長崎市の基幹産業の一つである水産業を支えていた遠洋漁業、特に以西底曳網漁業は、昭和 40 年代後半から過剰漁獲による資源の減少や燃料価格の高騰、労働者不足等を背景に衰退していき、漁業生産量は昭和 49 年（1974）をピークに減少し、厳しい漁業経営が続いている。また、沿岸漁業は、五島灘に面した西彼海域と橘湾に面した橘湾海域及び大村湾海域でそれぞれ営まれている。まき網漁業や定置網漁業、小型底曳網漁業などのほか、海面養殖業も営まれているが、漁業資源の減少、魚価の低迷、漁業就業者の減少や高齢化などの問題を抱えている。

国際交易都市であった長崎市は、第二次世界大戦前から異国情緒あふれる観光地として人気があったが、戦後は、新たに平和学習としての役割も加わった。長崎を舞台とした映画や歌謡も、観光人気を後押しし、観光業が一大産業となった。

軍艦島上陸観光

その一方で、高度経済成長による開発により、多く歴史的建造物や景観が失われたことに対し、市民の関心が高まっていた。昭和末期には明治時代に建てられた旧香港上海銀行長崎支店が解体されることとなり、大規模な市民運動が起こった。結果として当該建物の保存が決定され、後の都市景観条例制定や伝統的建造物群保存地区の指定に繋がった。炭鉱業や水産業、製造業といった戦前から営まれてきた基幹産業が衰退傾向にあるなか、保存された歴史的建造物や景観は、観光都市長崎の重要な資源の一つとなっている。また、独自の歴史文化遺産は、軍艦島上陸観光や長崎ランタンフェスティバルといった観光コンテンツとなっている。

長崎ランタンフェスティバル

(6) 長崎の歴史に関わりのある主な人物

○大村 純忠（1533～1587）

戦国時代の大村領主。島原半島を支配した有馬晴純の子で、大村純前の養子となり、同家 18 代当主となった。永禄５年(1562) 領内の横瀬浦(西海市)をポルトガル貿易港として開港、翌年には同地で受洗(洗礼名ドン・バルトロメウ)、我が国最初のキリシタン大名となった。元亀２年(1571)長崎港を開港、天正８年(1580)には長崎と茂木をイエズス会に寄進、さらには大友宗麟、有馬晴信とともに天正遣欧使節をローマに派遣するなど、長崎の繁栄とキリスト教の布教に尽力した。

大村純忠（左）
横瀬浦公園（西海市）にある陶板

○長崎甚左衛門純景（1549～1622）

長崎開港時の長崎領主。鎌倉時代以降、長崎を支配した長崎家の 14 代当主とされ、現在の桜馬場２丁目一帯に居館を構えた。甚左衛門は、大村純忠の家臣となり、純の字を与えられ、純景と名乗るとともに純忠の娘を妻とした。永禄６年(1563)純忠に従い受洗した(洗礼名ベルナルト)。純忠の良き協力者であったが、その死後は、19 代当主喜前に反発、慶長 10 年(1605)に知行地長崎村が幕府領になると、長崎を離れ、柳川藩主田中家に仕えた。同家の断絶後は横瀬浦(西海市)に隠居、同地で死去したとされる。墓碑は、西彼杵郡時津町にあり、県の史跡に指定されている。

長崎甚左衛門像
（長崎公園）

○隠元 隆 琦（1592～1673）

中国福建省福清県(福清市)の生まれ。万福寺(黄檗山、福清市)の住職を務めた。長崎の興福寺３代住職逸然らの招請に応じて渡来、興福寺の住職となった。寛文元年(1661)幕府の絶大な援助のもと、万福寺(黄檗山、京都府宇治市)を開き、同３年(1663)黄檗宗を開立した。黄檗宗は、臨済宗の一派で、臨済宗黄檗派と呼ばれたが、明治９年(1876)黄檗宗として公認された。隠元が伝えた黄檗文化は、建築や美術工芸、食文化など多彩で、江戸時代の我が国の文化に大きな影響を与えた。

隠元禅師画像
（長崎歴史文化博物館収蔵）

○頴川（えがわ） 藤左衛門（とうざえもん）（1617～1676）

福建省出身で住宅唐人の陳冲一の子として生まれる。陳道隆と称したが、日本に帰化、頴川（えがわ）藤左衛門と改称した。藤左衛門は、寛永 17 年(1640)に小通事（つうじ）、さらに翌年には大通事（つうじ）に昇進、以来、38 年にわたって唐通事（とうつうじ）（通事（つうじ）：通訳・貿易・外交に関する事務等を行う）を務めるなど、唐通事（とうつうじ）界の大御所的存在であった。福済寺の大壇越として隠元の弟子木庵とその法系の黄檗（おうばく）僧を招請、さらには長崎随一の壮麗さを誇った福済寺の建立、整備したほか、一瀬橋の架橋など慈善事業にも尽力した。墓は悟真寺後山にあり、市の史跡に指定されている。

市指定史跡
「唐通事頴川家初代墓地」

○フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（1796～1866）

ドイツ生まれ、医学者・博物学者。文政６年(1823)出島のオランダ商館医として赴任、翌年、長崎奉行の許可を得て、鳴滝に塾を開き、医学や博物学などを教えた。楠本たきとの間に生まれた娘楠本いねは、後に蘭方医学を学び産科医となった。シーボルトは、文政１１年(1828)のシーボルト事件で、国外追放となったが、帰国後はオランダのライデンで日本研究に没頭、『日本』『日本植物誌』『日本動物誌』を刊行、日本を世界に紹介した。シーボルトは、妻たきにちなんでアジサイの学名に「ヒドランゲア・オタクサ」と命名した。アジサイは、現在、長崎市の花に指定されている。

シーボルト肖像画
（長崎歴史文化博物館収蔵）

○高島（たかしま） 秋帆（しゅうはん）（1798～1866）

長崎の町年寄・高島家 10 代の三男、幕末期の兵学者。四郎太夫茂敦と称した。文化８年(1811)以降、高島家は出島の備場(砲台)を担当した。秋帆は石火矢の性能を高めるため、オランダの書物をもとに砲術を研究、高島流砲術を創始した。天保 11 年(1840)砲術の改革を上申(天保上書)、幕命によって翌年行った徳丸ケ原(東京都板橋区高島平)の演習は絶賛されたが、同 13 年(1842)謀反の疑いで逮捕され、中追放に処せられた。嘉永６年(1853)釈放され、以後は幕府の講武所の師範役などを務めた。

高島　秋帆
（長崎歴史文化博物館収蔵）

○本木（もとき） 昌造（しょうぞう）（1824～1875）

長崎会所請拂役馬田又次右衛門（新大工町乙名北島三弥太説あり）の子として生まれ、阿蘭陀通詞（おらんだつうじ）本木家の養子となった。阿蘭陀通詞（おらんだつうじ）となり、嘉永６年（1853）には小通詞（つうじ）過人に任じられ、同年、来航したロシア使節プチャーチンの通訳を務めた。安政元年（1854）以降、軍艦打立方、活字版刷立所取扱掛、海軍伝習所掛、長崎製鉄所頭取などを歴任したが、かたわら活字印刷の研究開発に専念、明治２年（1869）には新町（現在の興善町）に新街私塾を翌年に町活版所を開業、印刷技術の改良や後進の育成にあたるなど、我が国近代印刷発展の基礎を築いた。墓は大光寺（鍛冶屋町）境内にあり、市の史跡に指定されている。

本木　昌造
（長崎歴史文化博物館収蔵）

○小曽根（こぞね） 乾堂（けんどう）（1828～1885）

江戸時代末期から明治にかけての長崎を代表する豪商。安政６年（1859）の開港後、父六左衛門が大浦の外国人居留地造成に先行して、大浦の南に位置する浪の平海岸を自普請で埋め立てて築地を造成した。居留地造成に伴う下り松の埋め立てにより、居留地が小曽根築地とつながり、築地のうち約 3,000 坪が居留地に編入された。

乾堂は書画に長じ、篆刻（てんこく）も行い、明治維新後、詔により御璽（ぎょじ）・国璽（こくじ）を印刻している。また、私立小曽根小学校を創設し教育普及に尽力し、のちに校舎土地一切を長崎市に寄贈、旧長崎市立浪平小学校となった。

小曽根　乾堂（個人所蔵）

○ヨハネス・ポンペ・ファン・メールデルフォールト（1829～1908）

オランダの海軍軍医。長崎における第二次海軍伝習隊の一員として、安政４年（1857）、隊長カッテンディーケに従い来日。帰国するまでの５年の間に、松本良順以下多くの医学生に、化学などの基礎科学から、解剖学や病理学、外科学、臨床医学などにわたる系統だった医学教育を行った。また、安政６年（1859）、流行のコレラの防疫をはじめ、病人の診療にもあたった。幕府に病院建設を建議し、文久元年（1861）に小島の地に設置された養生所は、日本最初の近代西洋式病院であり、医学所も併設され、今日の長崎大学医学部の源流となった。

ポンペ
（長崎歴史文化博物館収蔵）

○西（にし） 道仙（どうせん）（1836～1913）

肥後国天草郡御領村（熊本県天草市）の医師西元良の子として生まれる。幼い時から儒学、医術を学び、特に詩書に長じた。文久３年（1863）、長崎に移住、医院を開き、明治５年（1872）には私学校「瓊林学館（けいりん）」を創設して子弟の教育にあたる。明治 10 年（1877）には九州で最初の日刊新聞である長崎自由新聞を創刊した。また、町会議員、長崎区連合町会議長、長崎区衛生幹事長を歴任、初代長崎区会議長となり、本河内の水源地の建設に尽力した。一方、歴史学者としても活躍、長崎文庫の創立委員として活動したほか、長崎古文書出版会を創設、『長崎夜話草』や『長崎港草』などを刊行した。

西　道仙
（長崎歴史文化博物館収蔵）

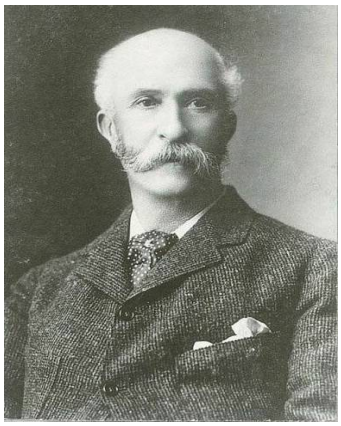
○岩崎（いわさき） 彌太郎（やたろう）（1834～1885）

土佐国（高知県）安芸郡生まれ。安政６年（1859）に、藩命で外国事情視察のため初めて長崎に来る。慶応３年（1867）、土佐藩開成館長崎出張所に勤務、藩の貿易などに従事。亀山社中が海援隊として土佐藩の外郭機関となると、藩命を受け隊の経理を担当。明治２年（1869）、海運業を行う九十九（つくも）商会が設立され、彌太郎は経営・監督の任にあたる。九十九商会は、明治６年（1873）、三菱商会へ社名を改め、彌太郎が経営する個人企業となる。その後も彌太郎は、明治 10 年（1877）の西南戦争などで、物資輸送を担い巨利を得た。その後、後藤象二郎より高島炭鉱を買取り、炭鉱経営に乗り出す。また、政府より工部省長崎造船局を借り受け、明治 17 年（1884）三菱造船所と命名して造船事業を本格的に開始。この造船事業は、後の三菱重工業株式会社長崎造船所に引き継がれ、大きく発展した。

岩崎　彌太郎
（三菱重工業㈱所蔵）

○トーマス・ブレーク・グラバー（1838～1911）

スコットランド出身。安政６年（1859）、開港後まもない長崎に渡来し、文久元年（1861）、「ジャーディン・マセソン商会」の長崎代理店としてグラバー商会を設立、貿易業を営む。明治元年（1868）には佐賀藩と合同で高島炭鉱開発に着手。また、薩摩藩とともに長崎の小菅に修船場を造る。明治３年（1870）、グラバー商会は倒産したが、グラバー自身はその後も日本に留まり、明治 18 年（1885）以後は、三菱財閥の相談役として活躍、晩年は東京で過ごした。造船・炭鉱・貿易業を通して、日本の近代化に貢献したグラバーは、明治 41 年（1908）、勲二等旭日重光章を授与された。明治 44 年（1911）に亡くなり、長崎市内の坂本国際墓地に葬られた。グラバーの息子の倉場富三郎は、ホーム・リンガー商会の社



グラバー
（長崎歴史文化博物館収蔵）

員のかたわら「長崎汽船漁業の重役としてトロール漁業を導入、なかでも『グラバー魚譜』(長崎大学所蔵)を編集制作するなど長崎の水産業の振興にも貢献した。

○上野（うえの） 彦馬（ひこま）（1838～1904）

長崎の上野俊之丞の四男として生まれる。上野家は代々絵師の家柄であった。彦馬は、医学伝習所でポンペに化学を習うなかで写真に興味を持ち、以後、その研究に没頭した。文久２年(1862)現在の新大工町に我が国最初の商業写真館上野撮影局を開業、長崎の人はもとより坂本龍馬や後藤象二郎、高杉晋作、さらにはグラバーやピエール・ロチ、ニコライ皇太子などを撮影した。彦馬は、内田九一など多くの門人を育成、我が国における写真の発展に大いに貢献した。

上野　彦馬
（長崎歴史文化博物館収蔵）

○マルコ・マリー・ド・ロ（1840～1914）

フランスのヴォスロールに生まれる。パリ外国宣教会神父。慶応４年（1868)、プティジャン神父の印刷技術を有する宣教師の募集に応じ来日、大浦天主堂で宗教教育のための印刷や建築事業等に従事した。明治12年（1879)、外海（そとめ）地方の主任司祭として赴任、教会の建設や農地の開拓、医療や教育、福祉などの活動に自費を投じて行った。特に貧困家庭のために、孤児院、救助院を設立。救助院で女性たちに織布、編物、素麺、マカロニ、パン、醤油の製造などの技術指導を行う。シーツやマカロニ、パンなどは長崎居留地の外国人に向け、素麺や醤油などは内地向けに販売された。大正３年(1914)に亡くなるまで、外海（そとめ）地区の殖産、福祉、医療等の充実に生涯を献げた。墓は、出津（しつ）の野道の信徒共同墓地にある。

ド・ロ神父
（長崎純心大学博物館蔵）

○金井（かない） 俊行（としゆき）（1850～1897）

長崎の金井八郎の子として生まれる。金井家は初代総蔵以来、長崎代官所の手代を務めた。俊行も長崎代官所の書役を務め、維新後は長崎府郡用方属役、さらには佐賀県大書記官などを歴任、明治19年(1886)退官、長崎区４代区長となった。以後、区政に辣腕を振るったが、特に本河内の水源地の建設には、数々の反対運動を克服、完成に漕ぎ着けた。退任後は長崎市会議員、南高来郡郡長、韓国釜山居留民総代などを歴任した。一方、歴史家としても活躍、『島原地変』や『増補長崎略史』などを編纂著述した。墓は椿原　墓地(西山本町)にある。

金井　俊行
（長崎歴史文化博物館収蔵）

○古賀（こが）　十二郎（じゅうじろう）（1879～1954）

長崎本五島町の古賀家に生まれる。古賀家は、江戸時代、福岡藩の用達を務めた旧家。明治 34 年(1901)高等商業学校附属外国語学校(現在の東京外国語大学)を卒業。以後、長崎に戻り執筆活動に従事した。大正２年(1913)長崎史談会を組織、同７年(1918)長崎市から市史の編さん委員に任命され、以後、『長崎市史　風俗編』などを執筆した。同９年(1920)オランダ女王より永年の日蘭親善に尽くした功績で「オラニエ・ナッソウ勲章」を授与された。同 11 年(1922)このころから愛八と長崎の民謡の調査を行う。以後も『西洋医術伝来史』『長崎絵画全史』『長崎開港史(遺稿)』『長崎洋学史(遺稿)』など多数を刊行、長崎学発展の基礎を築いた。

古賀　十二郎
（長崎歴史文化博物館収蔵）

○永井（ながい）　隆（たかし）（1908～1951）

島根県生まれ、長崎医科大学を卒業、同大物理的療法科主任助教授として勤務し、昭和 19 年（1944)、医学博士となる。昭和 20 年（1945）８月９日の当日は、爆心地からわずか 700ｍの長崎医科大学で被爆したが、懸命に救助活動にあたった。しかし、元々患っていた白血病に加え原爆症の症状が現れたことから救護活動を断念、病床のなか、原爆症の研究と小説や随筆、絵画、短歌などの執筆活動を行った。博士が執筆した『この子を残して』『長崎の鐘』などは映画化され、『長崎の鐘』はレコード化もされた。

原爆の悲惨さを訴え、平和への願いを込めた著書を世に送り、復興途上にあった長崎市民の精神的な支柱となり、国民に愛と平和に対する認識を新たにさせた功績で、長崎市名誉市民に選ばれ、国会でも表彰を受けた。

永井　隆
（長崎市永井隆記念館蔵）

4 長崎市の文化財

(1) 長崎市の文化財の状況

長崎市は、大陸に近いという立地的特性から、古くから海を介した交流が行われ、海外文化を受け入れながら、独自の文化を育んできた。長崎市内には、海外との交流の足跡や、交流のなかで培われた独特の文化、そして特色ある歴史を示す多種多様な文化財が分布している。文化財の特色について、主に下記の点が挙げられる。

①16 世紀末の長崎開港から、ポルトガルとの交流による南蛮文化やキリスト教文化の流入と受容を示すもの。

②江戸時代に中国とオランダに開かれた窓口として様々な海外文化を受け入れ、幕府直轄領を中心に独自の文化を形成していったことを示すものや、各藩領において地域特有の文化が形成されたことを示すもの。

③西洋の科学技術や情報の窓口として、我が国の近代化に大きく貢献したことを示すものや、幕末の開国後に設置された外国人居留地を中心とした、海外との交流を示すもの。

④原爆被災の惨状を伝え、平和都市としての国際的な平和発信を示すもの。

令和４年（2022）２月時点で長崎市の文化財は、国指定・選定の文化財 50 件、国認定の文化財が４件、国登録の文化財が 32 件あり、県指定文化財 69 件、市指定文化財 131 件の計 286 件が所在している。また。記録作成等の措置を講ずべき無形文化財１件及び記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財４件が国の選択を受けている。

また、長崎市には、二つの異なる世界文化遺産に属する、それぞれの構成資産が分布している。

一つは、平成 27 年(2015) 7 月登録の世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産（旧グラバー住宅、小菅修船場跡、三菱造船所第三船渠、三菱造船所占勝閣、三菱造船所旧木型場、三菱造船所ジャイアント・カンチレバークレーン、高島炭坑、端島炭坑）である。「明治日本の産業革命遺産」は、西洋地域から非西洋地域への産業化の移転が、短期間に成功したことを証明する遺産群である。長崎には、西洋の知識・技術導入の窓口としての役割を果たした歴史的背景から、明治維新前後に、造船や石炭産業の分野において、外国人により西洋技術が直接導入されたことを示す資産が多い。

もう一つは、平成 30 年（2018）７月登録の世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産である。17 世紀から 19 世紀の２世紀以上にわたるキリスト教禁教政策の下で、ひそかに信仰を伝えた人々の歴史を物語る類まれな遺産群である。長崎市にはキリシタンの潜伏集落であった「外海（そとめ）の出津（しつ）集落」・「外海（そとめ）の大野集落」、信徒発見の舞台となった「大浦天主堂」の３つの構成資産が所在している。

種類		国				県	市
		指定	選定	認定	登録	指定	指定
有形文化財	建造物	25	－	－	30	9	14
	絵画	4	－	4	－	9	3
	彫刻	1	－	－	－	5	1
	工芸品	－	－	－	－	5	18
	書跡・典籍	1	－	－	－	2	9
	古文書	－	－	－	－	2	2
	考古資料	－	－	－	－	2	－
	歴史資料	4	－	－	1	2	5
無形文化財		－	－	－	－	2	－
民俗文化財	有形の民俗文化財	－	－	－	－	1	7
	無形の民俗文化財	1	－	－	－	5	7
記念物	遺跡	9	－	－	－	13	41
	名勝地	－	－	－	1	1	1
	動物、植物、地質鉱物	2	－	－	－	12	23
文化的景観		－	1	－	－	－	－
伝統的建造物群		－	2	－	－	131	－
合計		47	3	4	32	70	131

長崎市の文化財件数（令和４年（2022）２月時点）

記録作成等の措置を講ずべき無形文化財　１件

明清楽（県指定無形文化財）

記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財　４件

竜踊（じゃおどり）（県指定無形民俗文化財）

野母（のも）の盆踊（県指定無形民俗文化財）

竹ン芸（市指定無形民俗文化財）

手熊・柿泊（かきどまり）のモットモ

※備考　記録選択されている文化財には県指定・市指定の文化財と重複するものがある。

ア 長崎市の主な文化財の概要

（7） 国宝

長崎市内には国宝が３件所在しており、いずれも海外交流の歴史を示す代表的な建造物である。

○崇福寺大雄宝殿

崇福寺は中国福建省福州府の在留唐人が中心となり創建した寺院。大雄宝殿は、大檀越（施主）の何高材の寄進によるもので、中国で切り組んだ用材を長崎に運び、正保３年（1646）に建立された。当初は単層の屋根であったが、後に、下層部に上層部を付加し、重層の現在の建物になった。下層部分には軒回りの逆擬宝珠束の持送りや前廊部分が黄檗天井と呼ばれるアーチ型の天井であるなど、中国の建築様式が見られる。

崇福寺大雄宝殿

○崇福寺第一峰門

現存遺構は、中国浙江省寧波で用材を切り組み、元禄８年（1695）に唐船数艘で長崎に運ばれたもので、再度組み立てられたのは翌年以降と考えられている。軒下には「四手先三葉栱」と呼ばれる特徴的な組み物が見られる。軒下軒裏には極彩色の吉祥模様を施し、雨がかり部分は朱丹一色塗にしてある。延宝元年（1673）に第一峰門より下段西向きに、新たに三門が建立されたので、この門は二の門となった。

崇福寺第一峰門と四手先三葉栱

○大浦天主堂

幕末の開国にともなって造成された長崎居留地に、在留外国人のために建設された国内現存最古の教会堂である。

直前に列聖（カトリックで聖人の位に列すること）されたばかりの「日本二十六聖殉教者」に捧げられた。設計指導はフランス人宣教師のフューレ、プティジャンの両神父で、施工は天草の小山秀が請け負った。元治元年（1864）末に竣工し、翌年２月に祝別（キリスト教で人や物を聖とする祈りとその儀式のこと）された。この直後の３月に、浦上の潜伏キリシタンが訪れ信仰の告白をしたことにより、世界の宗教史上にも類をみない劇的な「信徒発見」の舞台となった建物である。

大浦天主堂

（ｲ）　国指定等文化財

a 重要文化財（建造物・美術工芸品）

重要文化財の建造物は、黄檗寺院建築を始めとした中国文化の流入を示すものや、洋風建築などの幕末以降の西洋技術の導入を示すもの、いち早く近代技術が導入された土木施設などがある。

美術工芸品（絵画、彫刻、工芸品、書跡・典籍、古文書、考古資料、歴史資料）では、江戸時代に幕府の直轄領であった長崎奉行所に関する資料や、長崎における海外交流をよく表す絵画や歴史資料などキリスト教関係や近代化に関するものが指定を受けている。

○眼鏡橋

中島川に架かる石造アーチ橋。興福寺の唐僧黙子如定（のちに２代住職となる）が寛永 11 年（1634）に架けたと伝承されている。日本における最古の石橋アーチ橋である。

眼鏡橋の規模は、両端の親柱間が約 19m半、幅約５ｍ、アーチの支間８ｍ余りある。

眼鏡橋

○本河内水源地水道施設

中島川の上流に築かれた上水道施設で、明治 24 年（1891）に整備された高部貯水池の堰堤と配水池、拡張工事よって同 36 年（1903）に竣工した低部貯水池の堰堤などからなる。コレラ感染を未然に防ぎ公衆衛生を改善することを主な目的として、水道設備の必要性が提唱され、長崎水道（本河内高部ダム）が、横浜・函館に続いて我が国３番目の近代水道施設として建設された。これは日本人の設計・施工による最初のダム式水道施設であった。

本河内水源地水道施設は、我が国における最初期の近代水道施設であるばかりでなく、貯水池を備えた水道施設のはじまりであり、水道史上価値が高く、先駆的土木技術を駆使した我が国最初期の近代水道施設といわれている。

高部堰堤

低部堰堤

○紙本著色泰西王侯図六曲屏風

桃山時代にキリスト教を伝導していたイエズス会の指導で制作されたと考えられる初期洋風画の著名な作品である。西洋絵画陰影表現法により、描かれている。

古代から近世のヨーロッパの王侯・武将を 12 図に描くが、同種の題材を扱って 12 図を数える遺品は他になく、描写の優秀さの点からも貴重である。

紙本著色泰西王侯図六曲屏風
（長崎歴史文化博物館収蔵）

○長崎奉行所関係資料

江戸幕府の直轄領長崎を支配した長崎奉行所に関する文書・絵図類。長崎は、いわゆる「鎖国」体制下で、海外への窓口であったこともあり、内容は対外交渉や貿易統制、長崎警備、キリシタン禁圧等多岐にわたる。江戸時代における我が国の政治・外交・貿易に関する研究上重要な資料群である。

長崎奉行所関係資料
（長崎歴史文化博物館収蔵）

b 重要無形民俗文化財

○長崎くんちの奉納踊

諏訪神社の秋の大祭は、長崎くんちと呼ばれ、様々な出し物が奉納される。長崎くんちは、寛永 11 年(1634)に始まったが、時代とともに豪華なものとなった。奉納踊には本踊、川船、コッコデショ、鯨の潮吹きなどがあるが、なかには龍踊、唐人船、唐船祭、龍船、オランダ（阿蘭陀）船、阿蘭陀万歳、南蛮船などのように、異国情緒あふれるものもあり、長崎独特の民俗芸能として高く評価されている。

長崎くんちの奉納踊

c 記念物（史跡、天然記念物）

記念物のうち、特に史跡は、長崎港に代表されるように、海外との交流や海防というように海にまつわる遺跡や明治の近代化を示す遺跡、昭和の原爆の実相を伝える遺跡など長崎市の特異な歴史を表すものが多く指定を受けているといえる。また、天然記念物には、温暖な気候に恵まれた自然環境を示す亜熱帯性の動植物の生育地が指定を受けている。

○出島和蘭（おらんだ）商館跡

出島は、ポルトガル貿易を統制するために、寛永 13 年(1636)に築造された人工の島で、ポルトガル人が収容されたが、同 16 年(1639)のポルトガル人の追放で空地となった。寛永 18 年(1641)平戸からオランダ商館が移転、以後、出島は、218 年間、オランダ貿易の基地となり、我が国の近代化に大いに貢献した。現在、カピタン部屋やヘトル部屋、砂糖蔵、銅蔵などが復元され、19 世紀初頭の出島が再現されている。

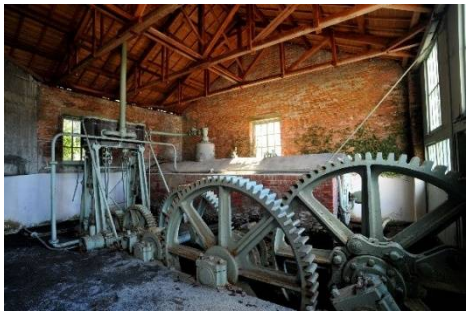
出島和蘭商館跡

○小菅修船場跡

我が国最初の洋式近代ドックである。レールの上に船架（船を載せる台）を置き、満潮を利用して船を乗せ、曳揚げ機小屋に設置してあるボイラー型蒸気機関の力で曳き揚げた。この施設は薩摩藩士五代才助、小松帯刀とイギリストーマス・ブレーク・グラバーらの尽力で設けられ、明治元年12月（1869.1）に落成している。曳揚げ機小屋は日本で現存する最古の煉瓦造の建物で、中に置かれている蒸気機関もイギリスから輸入したものである。

現存していないが、当時の船架がソロバン状に見えたことから、通称「ソロバン・ドック」とも呼ばれた。

小菅修船場跡



曳き揚げ機小屋内の
ボイラー型蒸気機関

○長崎原爆遺跡

昭和20年（1945）８月９日、長崎に投下された原子爆弾の被害を伝える遺跡である。爆心地と、その周辺に広がる破壊力を示す遺跡（旧城山国民学校校舎、崖下の小川に滑落した浦上天主堂旧鐘楼、爆風により傾いた旧長崎医科大学門柱、爆風で一本柱となった山王神社二の鳥居）で構成される。

長崎原爆遺跡（爆心地）

○キイレツチトリモチ自生北限地

ツチトリモチ科の寄生植物で、塊状（かいじょう）の地下茎でトベラやシャリンバイなどの樹木の根に寄生する。全体が淡黄色で、高さは10～15㎝、一見キノコ類と見間違えられる。キノコの頭のように見える部分は微小な雌花の集団で、雄花はその間に点々とまじる。

指定地は、本河内（ほんごうち）水源地の北側に広がる水源かん養林内である。このほか、市内では伊王島（いおうじま）町に市指定天然記念物の伊（い）王島（おうじま）キイレツチトリモチ群生地がある。

キイレツチトリモチ

d 重要伝統的建造物群保存地区

長崎市では、国選定重要伝統的建造物群保存地区が２地区所在する。いずれも安政５年（1858）に幕府が米、蘭、露、英、仏の５か国と修好通商条約を締結したことにより開港場の一つとして自由貿易港となった長崎に設けられた外国人居留地のまちなみを残すものである。

○長崎市東山手伝統的建造物群保存地区

長崎の居留地のうち、東山手の居留地は大浦川右岸の丘陵の一画にあたり、大浦の商館と海を見下ろす高台に位置する。初期のころはポルトガル、アメリカの各国領事官や礼拝堂が建ち、当時は領事館の丘とも呼ばれていた。その後、これらの跡地にミッション系の学校が増えて、現在に至っている。

東山手地区内の木造洋風建築

地区内の洋風建築物は、桟瓦葺（さんがわらぶ）き、外壁は下見板張（したみいたば）りペイント塗のものが多く、海の方向に開放的なベランダを付け、主要な部屋を配している。領事館や学校、住宅など用途が様々な建物が残り、坂の石畳の道や石垣、石溝、石標柱など居留地に造られたまちなみが広がる。

○長崎市南山手伝統的建造物群保存地区

南山手の居留地は、主として住宅地として使われていた区域であり、長崎湾を見下ろす眺望の良い丘の上に位置している。大浦川左岸で南に広がる丘陵で、その北よりには、大浦天主堂などの教会施設があり、そこから丘の上にかけて幕末から明治にかけての居留地時代の初期のころに建てられた旧グラバー住宅をはじめとする洋風住宅が建ち並んでいる。また、長崎港の海岸沿いには、かつて税関や銀行だった建物が海に面して建っている。地区内は居留地時代の土地の区画をよく表しており、現在でも静かな住宅地のなかには、明治時代初期から中期にかけての洋風住宅が比較的良好に残り、異国情緒を感じるまちなみを形成している。

南山手伝統的建造物群保存地区

e 重要文化的景観

長崎市の北部、西彼杵半島西部に位置する外海地区で、地域で多く産出される石で形成された石積みを特徴とした、近世から続く畑作を中心とした集落景観が国選定の重要文化的景観となっている。

○長崎市外海の石積集落景観

外海地区で営まれる畑作を中心とした集落景観で、開墾した際に出土した結晶片岩を用いて、土留の石垣などの集落を構成する構造物や居住地の塀や壁などを石積み構造物で構築し、特徴的な景観を形成している。地区の北西に位置する大野地区には、結晶片岩の石積みに加えて、大野岳周辺で産出される玄武岩を用いた石積みが見られ、外海地区の多様な石積文化を見ることができる。

外海の石積集落景観

f 登録文化財

令和４年（2022）２月時点で市内には登録有形文化財の建造物 30 件、歴史資料１件と登録記念物（名勝関係）１件が所在する。特に、世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産の１つになっているジャイアント・カンチレバークレーン（文化財名称：三菱重工業長崎造船所ハンマーヘッド型起重機）は、現在も長崎港に位置する長崎造船所において現役で稼働しており、造船の町の景観として長く市民に親しまれている。

○三菱重工業長崎造船所ハンマーヘッド型起重機

イギリスのマザーウェル・ブリッジ社から輸入され、明治 42 年（1909）12 月、三菱造船所（現・長崎造船所）飽の浦の、船の装備などを工事する艤装岸壁に設置された。昭和 20 年（1945）の原爆投下により被害を受けたが、その後、昭和 36 年（1961）、現在の水の浦岸壁に移設された。船舶エンジン、船舶プロペラ、船用ボイラーや艤装類、陸用原動機の積み出しのために稼働を続けて、現在に至っている。大きさは、全高が 62m、ジブ（クレーン腕の長さ）が 73m である。

長崎造船所の歴史を代表する構造物であるとともに、我が国の造船産業の近代化を支えた貴重な歴史的構造物でもある。

ハンマーヘッド型起重機

（ｳ） 県指定文化財

令和４年（2022）２月時点で長崎県指定文化財は 69 件あり、種別では有形文化財 35 件、無形文化財２件、民俗文化財６件、記念物 26 件である。ここでは中国をはじめとした海外との交流の歴史を知ることができる文化財を主に紹介する。

○東海の墓（有形文化財）

東海家の始祖徐敬雲は、中国浙江省の出身で、長崎に来航、住宅唐人となった。その子徐徳政の時に帰化、徳政は東海徳左衛門と称し、唐通事となった。以来、同家は９代にわたって唐通事を務め、特に２代徳左衛門は唐通事目付に、６代安兵衛は大通事助に任じられた。墓地は５段からなる中国様式の豪壮なもので、周囲にめぐらした壁や床面に石を張り、石柱などには彫刻が施されている。

東海の墓

○興福寺寺域（史跡）

我が国最古の唐寺で、元和６年(1620)中国江西省出身の真円によって開かれた。最初は船神媽祖を祀る祠堂であったが、大雄宝殿や鐘鼓楼、書院、庫裏などが建立され、次第に寺院としての体裁を整えて行った。承応３年(1654)渡来した隠元が我が国で最初に住職を務めたことから、黄檗宗発祥の地と称される。

興福寺寺域

○日本二十六聖人殉教地（史跡）

豊臣秀吉の禁教令によって京都や大坂で捕らえられた６名の外国人宣教師と 18 名の日本人信者(後に 20 名となる)は長崎に護送され、慶長元年 12 月 19 日(1597 年２月５日)西坂で処刑された。その後もこの地で多く人たちが殉教、世界的な殉教地として知られる。文久２年（1862)、ローマ教皇から 26 人の殉教者は聖人に列せられた。昭和 25 年（1950）にはローマ教皇がこの地をカトリック教徒の公式巡礼地として指定している。

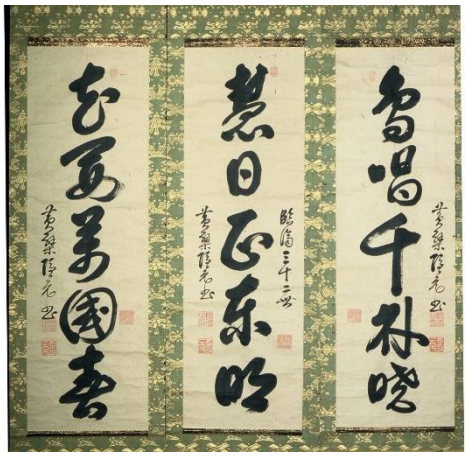
日本二十六聖人殉教地

（ｴ）　市指定文化財

令和４年（2022）２月時点で長崎市の市指定文化財は、有形文化財が 52 件、民俗文化財が 14 件、記念物が 65 件の合計 131 件が所在している。江戸時代に由来するものが多く、現在の長崎市域が、江戸時代には幕府直轄領（天領）や佐賀藩などの各藩領が所在した範囲であることから、海外との交流を示すものや各藩領の地域的な歴史や伝統文化を示すものなどが見られる。

○黄檗開祖国師三幅対（有形文化財）

黄檗開祖とは、承応３年（1654）に中国福建省の黄檗山万福寺より渡来した隠元禅師のことである。最初、興福寺の住職を務めたが、後に黄檗山万福寺（京都府宇治市）を開き、黄檗宗の開祖と称された。黄檗宗は臨済宗の一派で、江戸時代は臨済宗黄檗派と呼ばれたが、明治９年（1876）黄檗宗として公認された。本書幅は、筆勢もよく、隠元を代表する書の一つである。



黄檗開祖国師三幅対

○竹ン芸（無形民俗文化財）

風頭山の北面に位置する若宮稲荷神社の秋の大祭に奉納される芸能である。竹ン芸は、若宮稲荷神社の竹やぶで狐が戯れる様子を演じるもので、かつては、長崎くんちでも奉納されていた。高さ 11ｍもの２本の竹の上で、男女２匹の白狐に扮した男性が竹ン芸囃子（県指定無形民俗文化財）に合わせて軽やかな身のこなしで演じる。

なお、平成 15 年（2003）に国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択されている。

竹ン芸

○山王神社の大クス（天然記念物）

山王神社境内入口の２本のクスノキで、向かって右側の１本は胸高の幹回りが 8.2ｍ、左側の１本は約６ｍほどである。ともに昭和 20 年（1945）の原爆を受けて主幹の上部が折れ、熱線で幹肌を焼かれた。一時は全く落葉して枯れ木同然であったが、次第に生き返り樹勢を取り戻した。原爆の生き残りの樹木としての意義も深い。

山王神社の大クス

(2) 主な未指定文化財

長崎市内には江戸時代に佐賀藩や大村藩などの藩領で農・漁業が主な産業であった地域があり、多様性に富んだ民俗芸能が保存・継承されている。市内の神社でも、秋の祭りである「くんち」で様々な芸能が奉納されている。それぞれの地域の神社の祭りは、諏訪神社の「長崎くんち」に対して、「郷(さと)くんち」と呼ばれている。これらの民俗芸能のうち指定・未指定に関わらず 50 団体が「長崎市郷土芸能保存協議会」に所属し、協議会主催の大会にも出演して、保存継承に努めている。

(3) 文化

ア 音楽

長崎の音楽は、西洋や中国からの影響を色濃く受けてきた。古くから庶民の間で歌い継がれてきた民謡について、特に長崎の特徴として重要なものは、中国から伝わった明清楽(みんしんがく)（県指定無形文化財）や、キリスト教の布教によって、賛美歌やキリストの教えが歌となった「キリシタン歌」がある。

長崎明清楽保存会による明清楽の演奏

明清楽(みんしんがく)のなかで代表的なものは、月琴(げっきん)や胡弓(こきゅう)、琵琶(びわ)等を伴奏に歌い踊られた清楽(しんがく)「九連環(きゅうれんかん)」で、中国人が丸山遊女たちに伝授して親しまれ、文化・文政年間には「看々のう」、明治から大正にかけては「梅ヶ枝」、「法界節」、「さのさ」、「むらさき節」となって歌い継がれて行き、現在でも長崎くんちの奉納踊り等に色濃く残っている。それとともに、「長崎の明清楽(みんしんがく)」として長崎県の無形文化財に指定され、「明清楽(みんしんがく)」として国の記録作成等の措置を講ずべき無形文化財となっている。

長崎でのキリスト教の布教は、室町時代末期の天文 19 年（1550）にフランシスコ・ザビエルが平戸に来航して以来行われ、江戸時代に入るころには中世ヨーロッパの賛美歌を原曲とした「キリシタン歌」が流行歌のように歌われていた。その後キリスト教禁止令が出されるものの、その文化までは抹殺することができず、殉教者を讃えた歌等が潜伏キリシタンの民謡となって歌い継がれていった。

イ 食文化

長崎では豊富な海や山の幸に加え、中国、オランダ、ポルトガルなどの国から伝えられたそれぞれの食文化が融合されて、長崎独特の味覚として進化してきたことが特徴である。

卓袱料理

卓袱(しっぽく)料理は、大皿に盛られた料理と円卓を囲んで味わう宴会料理であり、和食、洋食、中国料理の要素が互いに混じり合った、まさに長崎らしい郷土料理とい

えるが、そのスタイルは、もともと唐人屋敷での中国人の料理を起源としていると伝えられる。中国から伝えられた、あるいは中国料理を起源とするものは多く、ボラの卵巣から作る「からすみ」は、江戸時代に中国から長崎にその製法が伝来したといわれる。

また、「長崎ちゃんぽん」は明治中期に中国人留学生のために栄養豊富で安価な料理をと、長崎の中国料理店が考案したのが始まりとされるが、ちゃんぽんから派生した「皿うどん」とともに、長崎名物として現在の我が国の食生活にも広く浸透している。

なお、長崎産の新鮮な地魚を使用した蒲鉾（かまぼこ）などの伝統的な水産加工品も、ちゃんぽんや皿うどんの具材として欠かせないものとなっている。近年では、戦後間もないころに誕生したとされる「トルコライス」も、長崎の味覚として受け入れられている。

料理と同様、西洋や中国伝来の菓子も独自に改良発展させ、ポルトガル由来の「カステラ」、「金平糖」をはじめ、中国由来の「月餅（げっぺい）」や「麻花兒（まふぁーる）（よりより）」、ポルトガル由来のカステラに中国の縁起物である桃を砂糖菓子であしらった「桃カステラ」などが、現在も多くの人々に親しまれている。ポルトガルから伝わった砂糖細工の有平糖の技術に餅粉を加えるなどの独自の技法を用いて成立した伝統工芸菓子「ぬくめ菓子」は、長崎くんちの庭見せを飾る季節菓子である。

長崎の菓子文化の発展の基となったのは、菓子の原材料となる白砂糖が、他地域に先駆けて唐船やポルトガル船によって長崎にもたらされたことにある。長崎では輸入された砂糖を菓子作りに用いるとともに、長崎街道を通じて国内各地に輸送したことから、街道沿いでは、丸ぼうろ（長崎～佐賀）、おこし（諫早～大村）、羊羹（ようかん）（小城）、鶏卵素麺（けいらん）（福岡）等の砂糖菓子が生まれ、長崎を起点とする長崎街道は、まさに「シュガーロード」としてその菓子文化を広げていった。

からすみ

ちゃんぽん・皿うどん

長崎蒲鉾

トルコライス

カステラ

中華菓子「麻花兒（よりより）」

桃カステラ

伝統工芸菓子「ぬくめ菓子」